フルアーマー ・クロスドレス

夢一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フルアーマー　・クロスドレス

【Ｎコード】
Ｎ１２１９Ｙ

【作者名】
夢一

【あらすじ】
どんなものでも装備できる最強の魔法『フルアーマー』を世界で唯一使えるのは世界を救った英雄の息子、マモリだけ。
父の装備で町を守っていたマモリだったが、突然呪いをかけられて男物の服が着れなくなってしまった。
仕方なく女の子の格好になって、新しい武器を集めながら呪いを解く旅へ出発。
仲間と出会い、敵の組織と戦う男の娘バトルファンタジー。

番外編はこちら

http://ncode.syosetu.com/n5517y/

英雄の息子マモリ（前書き）

初投稿作品になります。男の娘主人公で本格的な冒険ファンタジーを書いてみたいと思って書いています。
文章も内容も挿絵も残念レベルですが、少しでも興味を持って頂けたら、時間のある時にでも読んでみてくれると嬉しいです。

英雄の息子マモリ

＞i３４０７３―４３２０＜

１５年前、世界は一度魔物に支配されかかった。
だが一人の男が命をかけてそれを阻止した。
男は最強の魔法『フルアーマー』を駆使し、邪神アスモデウスを倒した。
世界に平和がおとずれた。

そして現在…

＞小王国・スタートロイ＜

「きゃーー！！！」

きぬを裂くようなありきたりな悲鳴が小さな城下町に響く。
街中をいつものように歩いていたその女性は、突然空から現れた人でも動物でもない生き物に驚いた。

「ババロンだ！」
「またか！最近多いな！」

「と、とにかくあの娘を助けないと！」

近くにいた大の大人たちがしどろもどろになりながら空から現れた存在を威嚇する。

ババロンと呼ばれたそれは、さながらプテラノドンのような姿をしていた。
大の男より一回り大きく
槍のように尖った口と牙。
翼には羽毛などはなく、薄い皮だけ。
足には鋭い鍵爪。
プテラノドンと違うのは、翼の他にも人間のような手が生えていることだ。

これが近頃スタートロイの街を騒がせてる魔物である。

「早くしないとあの娘が！」

魔物に立ち向かうのに躊躇する大の大人たち。
そこに…

「…まあ待ちなよ」

ピンク色セミロングの髪をなびかせ、余裕の笑みを見せながらいかにもケンカに弱そうな線の細い少年が男たちの前に出た。
はっきり言って少女にしか見えない。そんな少年が。
無地のTシャツにハーフパンツ。少年さながらのその格好でババロンを見据える。

「おお！マモリ！」

「マモリちゃん！」
「いいところに来てくれた！」
「いつものあれ頼むよ！」

「わかってるよ！…待っててよ、そこのお姉さん！」

言うなり少年は生身のままババロンに向かって駆けていった。

「フルアーマー・真空剣！！」

そう叫んだ、いや、唱えたマモリの姿は、一瞬緑色に輝いた。
次の瞬間には胸元から肩にかけて贅沢な装飾のあしらわれた強そうな鎧。
肩からはマント。
マモリは西洋の甲冑を豪華にしたような鎧を身に纏ってさらに勢いを増してババロンに突っ込んでいく。

そしてその手にはさっきまでなかったはずの大剣が握られていた。

どれもマモリという少女じみた少年には全く似つかわしくない装備である。
当然扱えるはずがない、動くことさえできないだろうと思ってしまうくらいの、大した装備だ。

「ギギッ！」

危険を察知したババロンはすぐに女性を諦め飛び立った。

「逃がさないよ！次またいつ襲いに来るかわかないからな！」

マモリはその手の剣を大きく振り上げ…

「ハーーー！！！」

振りおろした。

ビュゥゥゥン

降り下ろされた剣から真空波が生じ、直線軌道でそのままババロンの体を真っ二つにしてしまった。

切断されたババロンの体はそのまま森の方へ落ちていく。

なんともむごいことだが、魔物は動物よりも強大で、平気で人間を襲う。

やらなくてはやられてしまうのだ。

「…ふう」

マモリの溜息。

「おおおお！」

「やったー！さすがマモリ！」

「風の剣だ！かっこいい！！」

「いやぁ…最強の魔法フルアーマー、いつ見てもゾクゾクするな」

「あの変身っぷりもすごいけど、すごいのはやっぱりあの武器と鎧さ！」

「ああ！英雄ゼウが残した天下無双の武具だからな！」

「いやいや…それをああして自在に操るマモリが結局一番凄いんだって！」

当人のマモリを差し置いて勝手に盛り上がる一部始終を見ていた街

人たち。
マモリはそんな光景に慣れっこだった。

「マモリ…ありがとう。」
「え！？いや、いいよそんなの！」

お礼を言う女性に対して照れ隠しで答えるマモリ。
見た目がどおであれ、心は思春期の少年。女性からそう言われてうれしいのは当たり前。

「それより怪我とかない？」
照れ隠しである。

「ええ、大丈夫よ。お陰様で。それより本当にすごい魔法ね。世界中のどんな装備でも使いこなせちゃうんでしょ？伝説の武器だって…」

「うん。ていっても父さんが魔法と一緒に残してくれたやつだけどね。」

「それでも十分よ。マモリは十分すぎるくらいこの街と私たちを守ってくれてるわ。」

「やめてよ！…照れる。」
照れが隠しきれなかった。
さっきまでの自信はどこにいったのか、真っ赤になるマモリ。

英雄ゼウ、マモリの父の活躍により世界が魔物に支配される危機は去った。

だがまだ魔物は統制を失っただけで、人の驚異としては存在しつづけている。

マモリは父から授かった魔法『フルアーマー』の力で微弱ながらもこの国を守る立場にあった。

「やはりここじゃったか…フルアーマーの魔法…」

褒められ喜ぶマモリと、またそれを見て嬉しくなる街の人々。
そんな光景を上空から見届け、不適に笑う影があることに、まだ誰も気付いていなかった。

そしてこのあと、マモリの男として人生を変えてしまうようなことが起きてしまうことも。
誰も気づかなかった。

フルアーマー

＜スタートロイ…町はずれ＞

「ただいまー」

マモリは昼間の騒動を終えて町はずれの家に帰ってきた。
とたんにドタドタと騒がしい音が鳴り始める。

「おっかえりマモリーーーー！！」

マモリと同じピンク色の長い髪の女性がに勢いよく抱きついてきた。

「ちょっ、くっつかないでよ母さん！」
「えぇ！なんでよー。こんなに可愛い息子が帰ってきたらまずハグしてあげなくっちゃ！」
「もう俺１６だよ？恥ずかしいって…」
「いいじゃん！誰も見てないんだから。キスもしてあげようか？」
「絶対やめて！」

彼女はマモリの母、アイリ。
英雄ゼウが死んだ後もマモリを女手一つで育ててきたアイリは、マモリのことを誰よりも可愛がり、愛していた。
アイリとマモリはスタートロイの城下町から少し離れた丘の上に住んでいるのだ。

「聞いたわよ？また魔物を倒して街の人助けたんだって？」
「はやっ！ついさっきの話なんだけど…」
「母さんにはなんでもわかるのよん。」

アイリはとても１６歳の子がいるとは思えないと、街の人からもよく言われている。
だが実はもう３０を過ぎているのだが、見た目は２０代後半、性格は２０代前半といった感じだった。

「…まさか…俺のこと盗撮するような魔法使ってないだろうな…？」
「…それいいわね。」
「おい！」
「うそうそ。そんな魔法知らないから。」

アイリは魔法使いとしても有能な方で、マモリに魔力の操作などを教えたのも彼女だった。

「でもフルアーマーの魔法、だいぶ使えるようになってきたわね。」
「まあね。まあ父さんのくれた装備がすごいだけだけど。」
「それでも魔法自体をコントロールしないと、装備召喚もできないんだからね？」
「わかってるよ。だからまだ呼び出せない装備もたくさんあるんだ。」

『フルアーマー』の魔法は、亜空間にしまってある武器や防具を一瞬のうちに呼び出して装備することのできる魔法である。装備召喚には魔力が必要だが、一度装備してしまえばどんな代物でも自在に操ることができる。
強力な魔法剣や特殊なもの…伝説といわれるものでも操れてしまうのが、この魔法が最強といわれる所以だった。
そしてこの魔法が使えるのも世界中でマモリだけなのだ。

「それに気をつけなさいよ？あなたの持ってる武器や防具を狙ってる悪い奴だってたくさんいるんだから。」

「大丈夫だよ。そういう武器ヲタなやつらに強いのはいないからね。」
「なんでそんなこと言い切れるのよ…」
マモリとアイリはそのまま家の奥に入り、アイリは夕飯の用意を始めた。

＜スタートロイ…城下町…上空＞

「ふむ…あの少年を追うのは簡単じゃが、それでは少し芸がないのぅ…」
先ほどマモリを空から見ていた黒いローブの老人は考えていた。
そこに1匹のババロンが飛んできた。
近隣の森にはババロンが多数生息しており、スタートロイの人々の脅威となっている。

「下等手族か…まあこいつでもいいわい。」
そういいながら老人は右手をババロンの前に突き出した。
するとババロンの体はまるで後ろから引っ張られるようになり動きが止まる。
今度は左手を森の方向に向け、何かを引っ張るようにして自分の胸元にゆっくり引きよせた。
直後、森が大きなざわめきに包まれ、たくさんのババロンが上空に飛び出した。
そのままたくさんのババロンは老人の眼の前のババロンへと飛んできた。

いや、飛んできたのではなく引き寄せられてきたのだった。

「…魔獣合成…」

老人の眼の前でババロンたちは歪に混じり合い、大きくなる。
そこから粘土のように手足、翼、頭が現れる。

「ギギァァァァァァ！！！」

ビルのように大きな姿になったババロンは、そのまま城下町に降りて行った。

巨大ババロン

＜スタートロイ…マモリの家＞

「…母さん、今何か凄い音しなかった？」
「ん～…ドラゴンでも暴れてるんじゃないの？」
アイリは夕飯の用意をしながらマモリを適当にあしらった。

「この辺にドラゴンはいないだろ…」
マモリは腑に落ちないと感じつつも、とりあえず気にしないようにした。

「それよりマモリ～、ちょっと卵買ってきてよ！」
手がはなせないからと言うようにマモリに頼む。ずっと2人暮らしをしているため、こういう時のお使いくらいはマモリにとって当たり前だった。

「わかった。ちょっと待ってて！」
マモリはそういいながらパッと準備して家を出た。

「……うわぁぁ！！！」
突然大きな声をあげるマモリにアイリも駆けつける。
「マモリ！どうしたの！？」

そこには見たことない大きさのババロンの姿があり、今にも街を襲わんとしていた。

「何あれ！？」
「ババロンだよ！あんな大きさ…見たことないけど…。俺行ってく

る！」
信じられない巨大さのババロンに驚きつつも、マモリは急いで街の方に走った。

「マモリ！母さんも行くわ！」
異常事態だと確信したのか、アイリもマモリを追って街に向かった。

「母さん…危ないから家にいなよ！」
「何言ってるの？私だって魔法使いとしては有能な方なのよ！」
「知ってるけど…！」

＜スタートロイ…城下町＞

突如として現れた巨大ババロンにより、街はパニックになっていた。
王国兵士を筆頭に戦える者は前に出て巨大ババロンを攻撃している。
巨大ババロンも大きな傷はつかないものの、動きづらいようだ。

「なんて大きさだ…」
「怯むな！足を狙え！」
「戦えない者は早く城の中に！」
「魔法が使える者は動きを止めてくれ～！」

小王国スタートロイは、近隣そう強い魔物もおらず、貴重な資源もない小さな国だった。
それゆえ戦争などに巻き込まれることもなく、長年平和を維持していた。
だからこのような大型の魔物など相手は不慣れなのだ。

上空からその様子を見る黒ローブの老人。
「ふぇふぇふぇ…町が危ないぞ…フルアーマーの少年よ…早く助けにこんか…
そしてまたあの魔法を見せてくれ。」

＜スタートロイ城＞

「ええい！どうにかならんのか！？」
そう吠えているのはこの小王国を統治する痩せた体に髭をはやした男、スタートロイ王だ。

「国民のほとんどは場内に避難しました。ですがあの魔物自体はどうしようも…」
「この国の戦力はあのような大型の魔物に対応していませんから…」

「言われんでもわかっておるわ！…それでもどうにかせんと国が滅ぶだろう！」

「しかし…」
「…あのフルアーマーの少年…マモリが来れば…！」
常に王のそばで知恵を貸しているはずの大臣も今回は弱気だった。
マモリはこの国で最も強い力をもっている。そのため国の人間はどうしてもマモリを頼りにしてしまう。

「バカ者！一人の少年に頼るな！ここはおまえたちの国でもあるんだぞ！！？」

＜スタートロイ…城下町＞

＞ｉ３４１２５―４３２０＜

マモリたちが巨大ババロンの足元についたとき、兵士や街の人たちは傷だらけになりながら城に逃げて行くところだった。

「母さん！俺は空から一気にやるから足元で注意を引いて！」
「わかったわ」

巨大ババロンも２人の存在に気付いたようで、その大きな翼を羽ばたかせ、地面を蹴った。
強い突風が起き、２人はよろける。

「く…フルアーマー・滅竜剣！」

マモリが呪文を唱えると、今度は黄色に輝き、先刻の鎧とは別の鎧を身につけた。
全身に爪のような装飾、紫に輝くその鎧はどんな衝撃にも耐えれそうだ。
一番の特徴は、ドラゴンのような翼がついていたことだった。
剣は巨大なのこぎりのような形をしている。

マモリはその背中の翼で空に向かう巨大ババロンを追いかけた。
巨大ババロンは追ってくるマモリを迎撃しようと、手を大きく振り下ろす。
それをぎりぎりのところでかわすマモリ。

「アローレイ！！…マモリ！気をつけて！」
アイリは自分の息子に攻撃が当たらないように魔法の矢を打った。
光の矢がまっすぐ空中の巨大ババロンに向かっていく。
アイリのの打った矢は見事に巨大ババロンの目をとらえた。

「ギァァ！」

巨大ババロンは体制を崩して高度を下げた。
そのままマモリはその巨体を抜き去り、頭の上で剣を構える。

「ハァァァァ！」

マモリは剣を構えたまま急降下し、巨大ババロンの首を切り落とした。

呪われたマモリ

＜暗い部屋＞

スタートロイから数百キロの地点。とある場所のとある部屋。
部屋を暗くし、ベッドの中で話す怪しい男女。

「あのジジイ、大丈夫かしら？」
「心配ないさ。ああ見えても呪術師としては一流だし、頭もきれる。
ただ心配なのは…変態だってことだ。」
「ふふ、アレス様だって…変態ですものね。」

？燭の灯に照らされて、２人は唇を合わせる。

「あの力…フルアーマーだけは…放っておけんからな…」

＜スタートロイ…城下町＞

首を切られた巨大ババロンは、地面に落ちるかと思ったら黒い泡の
ようになって消えていった。

「これは…作られた命だったのね…」
アイリはこの魔法について知っているようだ。

「母さん、知ってるの？」
「ええ、これは黒魔法よ。きっとこのあたりのババロン全てを合成

させたんだと思う…。」
「そんな…誰がそんなことを！！？」

「は～可愛い顔してすごい力を持っているのぅ…」
2人の会話に割って入ってきたのは逃げ遅れた様子のおじいさんだった。

「な！大丈夫ですか！？」
怪我をしているらしく、動けないようだったので、マモリが急いで駆けつけると。
母アイリが声を上げる。

「マモリ！待って！！」

「え？」
母の声を聞いたときマモリはその老人に肩を貸そうとするところだった。

「ほほほ、ありがとう。お嬢ちゃん。」
マモリのことをお嬢ちゃんと呼んだその老人は、マモリの腕をつかみブツブツと聞こえない声で何かを囁きだす。
「おじいちゃん…俺男なんだけど…」

「マモリ！離れてっ！！」

…ドクン！！

心臓が跳ね上がるような感覚をマモリは感じた。
そう感じた瞬間、マモリの来ていた服が全て弾けとび、マモリは全裸になってしまった。

「…え？」
訳がわからないといった顔をするマモリ。
老人はあっけにとられるマモリを置き去りにし、平然と立ち上がる。
どこからか杖を取り出し、杖の上にスケートボードのように乗って宙に浮いた。

「うまくいったわい。呪いは直接体に触れなければかけられんからのぅ…。」
さっきまでの弱々しい雰囲気とはまるで別人だった。楽しそうに、また不気味に喋る。
「呪い…？」
「そうじゃ…フルアーマーの魔導師よ。貴様の中に眠るゼウの武具。それらを全て使えなくする呪いじゃよ。」

「え…？」
マモリは信じられないことを言われ、理解するのに時間がかかっていた。
マモリにとってフルアーマーの魔法とその武器や防具は父の形見でもあったため、その衝撃は大きかった。

「貴様は気づいていたみたいだな。女よ…」
老人はカイリの方に意識を向け、細い目をさらに細める。
「…今この街でマモリの存在や魔法を知らない人はいないのよ。それにあなたからはまだ魔力が感じられるわ。さっきの巨大ババロンもあなたの仕業ね？」

アイリは最初から違和感を感じていながらも、息子のマモリをみすみす老人に近づけてしまった悔しさにいらだっていた。

「その通りじゃよ。まああれはフルアーマーの力を見るための余興にすぎん。」

「余興？あんなことしておいて…よくもそんな！」

「ふふ…今はそんなこと言ってる場合かのぅ？」

そう言われてアイリははっとしたようにマモリのもとに駆け寄る。

「…マモリ？」

「フルアーマー・真空剣！」

その呪文でマモリは一瞬緑色に輝く。しかし輝きがおさまってもマモリは全裸のままだった。

「フルアーマー・滅龍剣！」

さっきと同様体は光る。しかし鎧を装備することはできなかった。

「フルアーマー・破邪の槍！」

魔除けの武器を召喚しようとしても結果は同じ。

「…そんな…」

茫然とするマモリ。

「…どういうこと！？フルアーマーはあの人がマモリに与えた絶対魔法のはずよ。呪いなんかでどうにかなるわけがないわ！！」

アイリも信じられないというように、またマモリの気持ちを代弁するように、老人を問いただす。

「わしの呪術をもってすれば、いくら英雄ゼウの魔法であろうと呪える…と言いたいところじゃが、それは無理じゃ。なのでその少年自身を呪わせてもらった。」

「マモリを…？どういうこと！！？」

「ふふふ…それはの……男物を装備できなくなる呪いじゃよ。今あのフルアーマーで呼び出せる強力な武具のすべては英雄ゼウのものであろう？ゼウは男…しからばその装備は全て男物ということになるであろう？」

老人の言葉はまるで変質者のようで、不気味な笑いが混ざっていた。

その言葉にあっけにとられるアイリ。

「…なにそれ？じゃあマモリは男の子の服が着れなくなっちゃったの！？」

それは間違いなく、わが子のかつてないピンチだった。

「そういうことじゃ。」

「そんな…変態か！」

さっきまで全裸で呆然としていたはずのマモリが大きな声をあげる。

悔しさよりもありえなさに対するつっこみのようだった。

「変態じゃ。」

「返せよ！魔法も装備も全部父さんの形見なんだぞ！？」

後から悔しさが増してきたのか、涙目になっている。

「別に奪ったわけではないぞ。魔法も装備もお主の中に残っておるからのぅ。」

「う…じゃあこれから一生…冬でも全裸で過ごせっていうのかよ！！？」

「わしも鬼じゃないからのぅ…そうならずに取り計らってやったんじゃ。」

「…は？」

それがどういう意味かもわかっていながら、信じたくないという気持ちで問い詰めてしまう。

「女子の物なら着れるということじゃ。…これからは少女として生きていくがよい。フルアーマー…ゼウの子よ」

突きつけられた現実に、マモリはショックを隠しきれなかった。

スタートロイ城

「それでは失礼するぞ。目的は果たしたからの…」
「待て！！」

そう言って老人は杖に乗ったまま空高くまで上昇して行った。
マモリの声に反応することなく、すでに次の仕事を頭に思い浮かべているようだった。

「…マモリ…」
自分の息子の将来について真剣に対策を考えながら、アイリはマモリに声をかけた。
しかしマモリは気が抜けたようにうつむいて立ち尽くしたままだ。

「…ふう……まあいいじゃない！男の子の服が着れなくなっただけでしょ？だったら女の子の服着て過ごせばいいのよ！…母さんはいいわよ。ていうかマモリは可愛いから、前から女の子の服を着せたいなって思ってたのよ。これからは娘として…ね？」

気楽な性分の母はすでに楽しみになっているようだった。その想いとマモリを慰めたい想いがごっちゃになっている。

「…親としてそれでいいの…？」
母の変わり身の早さにあっけにとられるマモリ。
どうしようもないので、近くにあった布切れを体に巻きつけてアイリと一緒に城に向かう。

＜スタートロイ城＞

巨大ババロンに襲われ多くの人が怪我をし、国民全員が城の中に集まっていた。
だがもともと結束の強い国で、傷ついた人たちの手当ても早く、すでに活力を取り戻していた。

城内では大臣たちが各所に指示し、壊れた家の建て直しや今後の対策など迅速な動きを見せている。

マモリも巻きつけた布を揺らせながらアイリと一緒に城の門をくぐった。
そこで待っていたのは、国の王子と数人の兵士だった。

「あら、ジード王子！」
アイリが王子に挨拶をする。とても王族と一般人とは思えないラフな挨拶で。
そういうラフさがまかり通るのも、この国の良さだった。

ジード王子はスタートロイ唯一の王家の跡取り。
現在は２５歳で国のために早く結婚相手を見つけろと父にうるさく言われている。

「お怪我はありませんか？」
「ええ…大丈夫よん。」

ジードは隣のみすぼらしい少女のような少年の顔を見て、それがマモリだと気づく。
「マ！マモリ！どうしたんだ、その格好は…！？」

ジードとマモリは小さいからよく一緒に遊ぶ兄弟のような関係だった。
というのも、英雄の家族としてマモリとアイリはよく城に招待されることが多かったからだ。
いつも鎧姿で活躍するマモリをよく知っているため、布切れ1枚のマモリの姿には驚いた。

「ああ…後で話すよ。それより街の人は？」
「それなら大したことはない。死人も出ていないしな。おまえのおかげだ。」
「それはよかったわ。ところでジード王子…国王様にお目通り願える？」
アイリは相変わらずの笑顔で国王への面会を要求する。
とてもさっきまで大型の魔物と戦っていたとは思えない。

「それはかまいませんが…」
「ちょ、母さん！」
「マモリもずっとそんな格好じゃいられないでしょ？」
そう言ってアイリは一国の王子を早くといわんばかりに引っ張って行った。

＜国王の間＞

スタートロイ王は難しい顔をして窓からさっきまで巨大ババロンが暴れていた場所を見つめている。

「…この国も…もっと…」
物思いにふけるのを遮るように、勢いよく扉が開く。
「失礼します、父上！アイリ・マモリの両名をお連れしました。」
「…入りたまえ。」
3人が室内に入る。もちろんマモリは布切れを巻きつけたまま。
「…マモリ…また国を守ってもらったな。…いつもすまない…兵士でもないお前に…」
王という立場も気にせず、スタートロイ王は少年に頭を下げる。
「いいよそんなの…それより…」
言いかけてマモリは言葉を詰まらせた。顔も真っ赤になっている。
それを見たジードが心配そうに顔を伺う。
「…どうしたのだ？…その格好…」
続きを話し出したのはアイリだった。最もアイリもそのつもりで王様の前に来たのだが。
「実はうちのマモリなんですけどね？ちょっと呪いにかけられてしまったんです。」
と、それほど深刻なことでもないような言い方でぶっちゃけるアイリ。
「なんと！」
「呪い！？」
「まあ一応報告しておきますと、さっきのババロンは呪術師の仕業

だったんですよ。黒魔法でこの近辺のババロンを合成させたものだったようです。」

「ということは、その呪術師がマモリを？その呪術師は？」

「逃げられました。でももう来ないと思いますよ。目的は果たしたって言っていたし…まあその目的がマモリを呪うことだったみたいですけど。」

国王もジードも、事態を想像しながらアイリの報告を真剣に聞いていた。

マモリは相変わらず赤くなったままだ。

「まあ…ご想像通りだと思いますが、フルアーマーの魔法を狙ってたみたいなんですよね。」

「…うぅむ、だがあの魔法は取り出すことも呪うこともできないはずの絶対魔法だろう？」

「ええ、だから呪われたのはマモリ自身なんです。…その…男の子の服が着れない呪いをかけられちゃって！」

マモリは耳まで真っ赤になった。

「なんと…それでゼウの鎧を装着できなくなったということか…」

「そうなんです。まあそういうわけなんで、国王様にはマモリの服を用意してもらいたくって。女の子の服を。」

「えぇ！？母さん！！」

まさかここでというように、マモリは声を上げた。

「だってしょうがないでしょう？このままずっと布だけで生きてい

くの？」
「それは…」

「マモリ…」
ジードは複雑だった。ジードは以前からマモリの可愛さに想うところがあったからだ。
マモリのピンク色の髪、白い肌、重厚な鎧を着こなすのが信じられないほどの細い体。
それはその辺の街娘よりもずっと可愛らしいのではと思い続けていたのだった。
もっとも、そう思っているのは、ジード以外にも何人もいるわけだが。

「わかった。では２０着ほど服を用意させよう。下着もな。」
「（下着っ！！？）」
「ありがとうございます。」

「…ちょっと待ってください！」
特に動揺もなく事態を飲み込んでしまったどころか、下着まで用意すると言う国王の発言に焦り、マモリも打って出る。
マモリはもともと一生布だけで生きていくつもりも、一生女の子の格好で生きていくつもりもなかった。

「どうしたの、マモリ？やっぱり女の子の服は嫌…？」
「そうじゃなくて…ってそりゃ嫌だし恥ずかしいけど…そういうことじゃなくて…」
「？…じゃあ何？」
「この呪いを解くとか…そういう方向性はないのかよ！？」
マモリはなぜみんなあっさり受け入れるのかずっと疑問だったため、ついにその問いを投げかけたのだった。

「それは難しいわね。呪いっていうのはね、術者にもリスクがかかる危険なものなの。その分強力な魔力が込められていてね。呪いをかけた本人にしか解けないようになってるのよ。」
「そんな…」
まあなんとなくそんな気はしていたマモリだが、今は小さな希望が打ち砕かれた思いだった。

「ま、諦めて娘になっちゃいなさいよ。母さん、マモリなら絶世の美女になると思うけどな。」
ジードが内心で激しく同意する。

「やめてくれよ！…だったら…あのじいさんを探す！」
もうマモリに残された道はそれしかなかった。
マモリにとって女の子としての生活なんてありえない。

「何言ってるのよ…どこに行ったかもわからないでしょ？」
「そうだけど…このままなんて嫌だよ！それにあのじいさんが飛んでいった方向はちゃんと見てたんだから！」
アイリは自分の息子を娘にすることにためらいがない様子だが、マモリも引くわけにはいかない。

「それはだめだ！マモリはこの国にいないと！！」
そう言ったのはジードだった。

「なんでだよ。俺が強い力を持ってるからか？でももうそれが使えなくなったんだぞ！？」
ジードはもちろんそういうつもりで言ったのではなかったのだが、マモリにはその気持ちは伝わるはずがない。

初めての女装

マモリの強い要求に、一同は戸惑っていた。
その理由はマモリと離れたくない、危険にさらしたくない、この国を守ってほしいという想いの他にもあったからだ。

アイリと国王の目が交差する。
そしてアイリはため息をつき、マモリの方に向きなおった。

「やっぱり…どうしようもない運命なのかもね…マモリ。」
「は？」
まるでこうなることがわかっていたように、アイリはマモリに微笑みかけた。

「国王様…この子とお別れの時が来たみたいです。」
いつになく真剣な表情になるアイリ。

「…そのようだな…。国としても、これ以上マモリに負担をかけまいと体勢を整えていたところだ。…いい時期かもしれんな。」
国王も同様に真剣な表情でマモリを見つめる。

「私も…用意はできています。」

「おいジード、この2人…何の話をしてるんだ…？」
勝手に話を勧める母親と国王についていけず、ジードに助けを求める。
だがジードにも訳がわからない会話だった。

「さぁ…それよりマモリ！まさかこの国を出るつもりじゃないだろ

うな！！？」
「あのじいさんがもっと遠いところに行ったんだ。俺も行くよ。俺、ずっと女の格好なんて嫌だもん。」
「…マモリ…」
マモリが遠くに行ってしまう。それだけはマモリの言葉からも国王たちの会話からも理解できた。

ジードの言葉を遮ったのは国王だった。
「誰か！宝物庫の奥のあれを持って参れ！」

続いてアイリも、穏やかな顔でマモリの前に立つ。
「マモリ…これでフルアーマーの魔法を使いなさい。」
そういってアイリは左手に魔力をこめ、空間に小さな穴を作る。
その中に右手をいれ、開いた空間から一本の剣を取り出した。

「これは守護の剣…聖剣イージス。お父さんが私とあなたを守るようにくれた剣よ。」
「父さんが…？」
「さあ…この剣でフルアーマーの魔法を使いなさい。」
「…でも…フルアーマーは…」

そう言われてアイリはマモリが父の装備しか使ったことがないのを思いだした。
「大丈夫よ。フルアーマーの武器と防具はセットなの。知ってるでしょ？新しい武器を手にしてフルアーマーを使えば、その武器に合った服や鎧が精製されるわ。」

「そう…だったんだ。」

「マモリは今男の服が着れない呪いにかかってるから、精製される

のは女の子の服だと思うけどね。」
アイリはまたいつもの笑顔で、でも少し淋しそうに言う。

「…てことは、これでフルアーマー使ったらどんな格好になるかわからないってことか…。恥ずかしいのや、変なのになったら嫌だな…」
フルアーマーの知らなかった機能は理解して、こんどは不安が大きくなる。

「大丈夫よ！ずっと母さんが持ってた剣なんだら。きっと凄く可愛い衣装が出きるわよ！」
もはや鎧ではなく衣装と言い出す母。
「マモリ、母さんの愛と…父さんの魔法を信じなさい」
マモリの両肩をポンと叩き、今までにないくらいの笑顔を見せる。

「……わかった。」
そう言ってマモリは魔力を手の内にある聖剣イージスに込め始める。
腹をくくったようだ。

「フルアーマー……イージス！！」

マモリの体が七色に輝き出し、纏っていた布切れが宙を舞い、マモリの体が新しい素材に包まれていく。
やがてマモリから発せられていた光が消えていく。

光りが消え、そこに立っていたのは紛れもなく美少女だった。
肩と胸には鎧と言える金属アーマーがついているが、丸みを帯びて可愛らしいデザイン。
その下ではスクール水着のような藍色の布が腰のくびれを強調している。

淡いスカイブルーのスカートはプリーツ状になっており、太ももの半分の位置で布がなくなっていた。
さらに下には黒のニーソックス。その絶対領域はマモリが男とわかっていても、ドキドキさせるのに十分だった。

＞i３４１９５―４３２０＜

一瞬その場が沈黙する。

「え…？…ぅわ！！」
マモリは下を見て自分の格好を見てとても恥ずかしくなり、母や国王に背を向けてしゃがみこんだ。

ミニスカートなどはいたこともないのだから、普通にしゃがめばスカートの中が見えてしまうことなどわかるはずもない。

運悪くその先にはジードが立っていた。

「！！！！」
スカートの中を確認するジード。白い生地にレースをあしらった可愛らしいショーツ。
そして女の子にはあるはずのない膨らみ。

ジードは溢れ出そうになる鼻血を理性で止める。さすがは一国の跡取り。

「か…か…かか…！」

マモリは後ろの声に一瞬肝が冷えた。

「カワイーーー！！マモリーー！！」

案の定ハイテンションになった母親が抱きついてくる。

「マモリすごく可愛いわよ！あぁ…さすが母さんの娘だわ！」

「娘じゃないから！」

「ねぇ！下着はどうなってるの？どんないやらしい下着はいてるのよ！」

「人前でそういうこと聞く！？それでも親か！」

アイリは楽しくてしょうがない。

「それに自分でも見てないんだからわからないよ…」

「じゃあスカート捲って見てみなさいよ！」

「できるかぁ！！！」

一人スカートの中知っているジードは、何とも言えない優越感に浸っていた。

「オホン」

国王の咳払いで、アイリも我に返り、また真剣な表情に戻る。

すると、扉が開き、大臣が一人入ってくる。

「陛下、あれをお持ちしました。」

「あれ？」

父の遺品

大臣が持ってきたのは小さな箱だった。
中心に大きな宝石が埋め込まれており、そこから四方に溝が掘られている。。

「うむ。それをマモリに。」

大臣はマモリの姿に少し驚いたようだったが、その件には触れず、静かにマモリに箱を渡した。

マモリはその箱を持った瞬間、不思議な感覚にとらわれる。
まるでこの中に引きずり困れるような。
でも怖くはない、優しさに満ちた。
この箱を手にするのをずっと待っていたみたいだった。

「マモリ…その箱に魔力を込めて、フルアーマーを唱えなさい。それの名前は…ガメイラよ。」

「ガメイラ…」
マモリはこんな箱でフルアーマーが使えるのかと疑問に思いながら、魔力をこめる。
すると箱の中央の宝石が光だす。
マモリはさっきの感覚を思い出し、フルアーマーを唱えた。

「うん…フルアーマー・ガメイラ！」

箱の宝石がより強く光だし、その光が四方の溝に走る。
箱全体が光、蓋の部分が宝石と一緒に消えていく。

と思ったら勢いよく中から何か飛び出し、マモリの首に巻きついた。その物体は少しずつ形を整えていき、ペンダントの形になってマモリの胸元に落ち着いた。

「…これは？」

「それは人格魔導具、ガメイラ。これからあなたを助けてくれるわ。」

「人格…魔導具…？」

「ええ、今はまだ眠っているみたいだけど、じきに目を覚ますわ。」

「目を覚ま…え…？」

その様子を見て安心したように国王も口を開く。

「それはお主の父が戦いに行くとき、私に預けて行った物だ。もしもマモリがこの国を出て行くことがあれば、渡してほしいと。」

聖剣イージスに続き、またしても父の遺品。マモリは胸元のペンダントを見つめ、さっきの感覚は父の魔力が残っていたのだと思った。

「それで…これってどういう物なの？」

「ガメイラが目を覚ました時に、きっと教えてくれるわ。ただ一つだけ言っておくと…そのガメイラは知識と記憶の塊のようなもの。」

そういった母の目には少し涙が溜まっていた。それが珍しかったのか、マモリはどうしていいかわからず、黙ってしまう。

「マモリよ…すぐに行くのか？」

国王の言葉ではっとする。

「え？ああ…そのつもりだよ？じゃないと追い付けないかもしれないから。」

「な！本気か、マモリ！？外は危険が…」
「ジード！！！」
慌てる王子様を国王が静止する。
「お前の気持ちもわかる。だがこれも運命なのだ。」

そんな大袈裟な…。
マモリはそう思いながらも回りの事の運びに圧倒されてつっこめなかった。
マモリは軽くあの老人を捕まえて、呪いをといてすぐ帰るつもりなのだから当然である。

今度は侍女がきらびやかなドレス等、たくさんの服を持って来た。
「持って行くがよい。フルアーマーの魔空間に入れておけばいくらでも持っていけるのだろう？」

「え！…いらないよ！すぐに戻って来るんだし…」

「まあいいじゃない。もらっておきなさいよ、マモリ！もし本当に要らなくなったら私が貰うから。」
そう言ってアイリは勝手に服を受け取った。
「…わかったよ。」
マモリも仕方なくフルアーマーの魔空間を開き、その中に服を入れていく。

旅立ち

スタートロイは小さな国。そのため外交を含めてよく国の外に出ることもあった。小さな村や街もある。
マモリたちも例外ではない。

だからマモリはいつものようにお使いに行って帰って来るつもりだけのつもりだった。

「まあ…色々もらっちゃったけど、呪い解いたら…すぐ帰ってくるから！」

「…そうね…待ってるわ、マモリ。」
アイリはまた泣きそうになっていた。

「気をつけてな。」

「マモリ！…私がついてってやろうか？」
ジードは以前からマモリのことを意識していたが、今のマモリを見て一層離れるのが不安になっていた。

「なんでだよ。すぐ帰ってくるからジードは残って嫁さん探せって！」
「ぐっ！」
「そうだぞジード。明日には同盟国のメザーレイアから姫君が訪れる。お前がおらんでどうする。」

「…わかった。マモリ、すぐに帰ってこいよ！」
ジードはしぶしぶマモリの出発を了承した。

「じゃあ母さん、俺やっぱり娘になる気もないし、父さんの武器もっと使えるようになりたいから…行ってくるよ！」

「ええ…行ってらっしゃい。マモリ…」

こうしてマモリは部屋を、城を、そして国を後にした。
持てるだけの食糧と、ある程度のお金を持って。
慣れないスカートのまま。
たった一人で…。

「…予言が、当たってしまいましたな。」
「はい、まさかこんな形で…こんなに急に…」
さっきまで堪えていた涙を流し、城の窓から娘の姿をした息子を見送るアイリ。

「新しい英雄の誕生となれば良いが…」
「きっと…あの子なら大丈夫です。どんな困難も乗り越えますよ。
…彼女がついているし、何より…あの人の息子だから…」

ガメイラ

＞i３４３２６―４３２０＜

＜カウロイ村＞

スタートロイ王国から少し離れた小さな村。
農業や家畜の飼育が盛んで、スタートロイが統治している。
最近では山賊がよく食料を奪いに来るため、スタートロイの兵士が常駐している。
マモリも作物を買いに、母のアイリと何度か来ていたため、よく知っている村だ。

老人はこの村の方向に来たのを見ていたマモリは、ここで情報を得ようと立ち寄ったのだった。

「あのじいさん、ここにいてくれたらいいんだけどな…。いなくても誰か見たっていた人がいたらいいんだけど…」

「あれ？マモリ君でねか！」
「（ギク！）」
小太りのおじさんがマモリに声をかけた。マモリがカウロイ村に来るたびにお世話になってるおじさんだった。
女装しているため、あまり知ってる人には会いたくないマモリだった。

「どした、そんなめんこい格好して。マモリ君は女の子だったかいな？」
陽気に笑いながらマモリに近づくおじさん。

いつもならその陽気な笑いにとても癒されるのだが、今回は事情が違っていた。

「…どうもおじさん。いつもお世話になっています。」
マモリは苦笑いでその笑顔に応え、挨拶する。
「この格好は…まあいろいろ事情があって…あんまり触れないでください。」
顔を真っ赤にするマモリ。

「わはは。そんな下ばっかり向いてっと、お天とさんに怒られるぞ！似合ってんだからどうどうとしろ！」
おじさんの言葉に少し安心したマモリは、老人のことを聞いてみることにした。

「おじさん、今日は別の用事で来たんです。昨日杖に乗った黒いローブのおじいさん、この村に来ませんでしたか？」
「ああ…どうだったかなあ…わからねえや。」
「そうですか…」

ドガァァァン！！！

何かをぶつけるような大きな音に驚くマモリとおじさん。
その直後にガラの悪そうな大きな声が響き渡る。

「オラオラオラー！さっさと食料を出しやがれ！ここの食いものは山賊・バーバリ団のものだろうが！」

マモリとおじさんはすぐにその場に駆け付けた。

そこにはさっき声を上げたリーダー格の長髪の男と数人の乱暴そうな男たちが、村の物を壊してまわっていた。

「おじさん…こいつらは！！？」

「…この辺を荒らしている山賊だ…」

「でも城の兵士がいるはずじゃ…そのおかげで山賊はいなくなったって聞いてたのに！」

「…ああ、なんでも昨日、大きな怪獣が街を壊したらしくってな…その復旧で城に戻ってんだ…！」

「！（…あの巨大ババロンのせいだ…！）」

マモリは兵士不在の訳を知り、それをどこかで聞いたこの山賊たちが戻ってきたんだとわかった。

「…ん？なんだかやけに可愛い娘がいるじゃねえか！あいつは俺の物にしよう…」

長髪の男がマモリに気づき、全身を舐めるように見定めた。

「おい野郎ども！あの娘を捕まえてこい！！」

「へい！！」

マモリに男たちが襲い掛かってくる。

「く…フルアーマー・イージス！」

魔空間にしまっておいた聖剣イージスと、その服を召喚する。

イージスを手にするやいなや、マモリは襲いかかる男たちの手を華麗にかわしながら、男たちが持っている武器を次々と壊していく。

実戦で使うのは初めてだったため、その動きにマモリ自身も驚いた。

「この剣…すごい！」

「な…なんだこの女…！」
驚く長髪の男。

「女じゃない！俺は…男だ！」
そう言われてもまずは信じられないだろう。
山賊たちからすれば、マモリはどう見ても美少女剣士だ。

「嘘つけ――！そんな可愛い娘が男のはずがあるかぁ！」

マモリは勢いに乗せて長髪の男に切りかかった。
長髪の男はギリギリその攻撃をかわす。
が、持っていた武器を手放してしまう。
だがすぐに体勢を整え、マモリに突っ込んできた。
至近距離で懐の小刀を取り出し、マモリの腕を狙う。
マモリもその攻撃をよけるが、胸元のガメイラに小刀が当たってしまう。

「あ！くそぅ！！」
「小娘が…なめるなー！」
「男だって言ってるだろー！」

お互いが一度後ろに跳び、すぐに切りかかる。
長髪の男の攻撃を前にかわし、マモリは長髪の男の後頭部を柄で強く打った。

長髪の男は気を失い、前のめりに倒れた。

「うわぁぁ…」
慌てる下っ端たち。
「しかたねぇ…ずらかるぞ！！」

そう言って武器を破壊された下っ端たちが、長髪の男を担いで逃げて行った。

「…ふう。」
軽く一仕事終わったというように溜息を吐くマモリ。

「マモリくん、ありがとう！それにしても強えな～…戦う美少女！勝利の女神様だ！」
おじさんが笑いながらマモリの肩をたたく。
「ちょ…それはやめてよ、おじさん！」

「お姉ちゃんありがとう！」
近くで見ていた少年や少女、村人が次々とお礼を言う。
「だから俺は……はぁ、もういいや。」
みんなの笑顔でどうでもよくなった。それにこの場合男と思われた方が変態扱いされるんじゃないかと思うマモリだった。

「へぇ…なかなか可愛いわね、マモリちゃん。」

すぐ近くから突然声が聞こえ、マモリは警戒心を強めた。
「！！」
周りを見回してみても声の主らしき人はいない。その声元はあまりにも近すぎた。

「ここよここ！下！」

マモリは母の言葉を思い出す。

――今はまだ眠っているみたいだけど、じきに目を覚ますわ――
確かにそう言っていた。
マモリは恐る恐るガメイラを見る。

「そうよ！私！ガメイラ！」

その声は確かに胸のペンダントから聞こえていた。

「さっき目が覚めたわ。ここわ…カウロイ村ね。私が起きたってことは…。マモリちゃん？」
「え！？…いや…えぇ！！？」
「何驚いてるのよ…。それにしてもマモリちゃん大きくなったわね。」
「え！何言ってるの…？俺のこと知って……君、なんなの？」

急に馴れ馴れしく話しかけてきたペンダントに戸惑いを隠せない。

「私は人格魔導具のガメイラよ。あなたの旅のサポートをするためにあなたのお父さんゼウに作られたの。その時あなたはまだ小さかったから覚えてないわよね？」

覚えてないどころか、こんな奇妙な存在が家の物だったなんて全く知らなかった。

「私にはこの世界の全てに近い知識が入っているわ。それはきっとこれからのあなたに必要なもの。」
「…どういうこと？」
「…ん？だから、これからあなたが旅をするために私の知識が必要になるだろうってこと。」
「旅って…俺は用事は終わったらすぐに帰るつもりなんだけど…」

「え？」
ガメイラはしばらく黙り、また声を出した。顔も口もないから話し出すタイミングが全く読めない。
「その用事って…その呪いを解くことでしょう？」
「呪いのこともわかるの！？」
「ええ。あなたは今男の子の服が着れない呪いにかかってる。あなたから魔力をもらって話してるんだから、それくらいわかるわ。その呪いをとくためにってことよね？」
「そう！そういうこと！！」
「…だったら私が力を貸してあげる。っていってもその呪いをかけた張本人を見つけなくちゃだけどね。」
その言葉でマモリは老人を探していることを思い出した。
「そうだよ！あのおじいさんを探さなきゃ！誰か知ってる人…」
「おい、マモリくん！！」
それぞれの作業に戻っていく村人の中、おじさんがまた声をかける。
「さっきはありがとな。兵士さんも明日にはまた戻ってくれるらしいてよ。」
「それは良かった！」
その言葉を聞いてマモリは安心する。
実は自分が村から離れて大丈夫かと心配していたのだ。
「それからな、さっきマモリくんが言ってた杖に乗ったローブのじいさんの事思い出したよ！たしかウォーロッセオの方に飛んでいったぞ。」

「え！！……ウォーロッセオ…遠いな。」
「これから作物を届けに行くんだけど、一緒に連れて行ってあげようか？」
おじさんはもともと作物をいろんな場所に届けるような仕事をしていたので、専用のジープを持っている。
ウォーロッセオは歩いて行ったら一週間はかかるような場所だ。
マモリはこれを絶好のチャンスと思い、乗せてもらうことにした。
「ありがとう、おじさん！よろしく頼むよ！！」
「よし！！じゃあ家に行ってジープに乗ってな！すぐ準備すっから。」

マモリは行き慣れたおじさんの家に行き、ジープに乗った。
しかし、老人が思っていた以上に遠くに行っており、本当に呪いが解けるのか不安になっていた。
「大丈夫よ。ウォーロッセオに行けば確実にそのおじいさんに会えるわ。」
ガメイラの言葉には確信があるようだった。
「それにしてもマモリちゃん…」
「…何？」
「美人に育ったわね。」
「やめてよ！」
そしてマモリを乗せたおじさんのジープは、ウォーロッセオに向けて出発した。

ウォーロッセオの闘技場で

＜闘技場のある町・ウォーロッセオ＞

数百年の歴史を誇る巨大闘技場で有名な町。
今でもその闘技場では毎週何かしらの競技が行われている。
ゆえにこの町には腕に自身のあるもの、闘いが好きな者、またそれを見物したい者がたくさん集まる。

「ありがとう、おじさん！ここでいいよ！」

ウォーロッセオ内の商店街でジープを止める。

「そうけ？まあこんだけ人がいれば誰かそのじいさんを知ってるかもな！」
「うん！ほんと助かった。戻ったらまたおいしい野菜食べさせてね！」
「おう、それじゃ気をつけてな！」

マモリはジープを降り、おじさんと別れた。

「とにかくあのじいさん探さないと…。この町に居てくれるといいけど。」
「大丈夫よ。きっとこの町にいるわ。」
「なんで解るんだよ。」
「女の勘よ！」
「（女なんだ…。）」
自身満々に喋る胸元のペンダント・ガメイラに、マモリは相変わらず何からどう突っ込んだらいいのかわからないでいた。

＜ウォーロッセオ・とある場所＞

一人で暮らすには充分過ぎる広さだが、大人数が入るには少し狭い空き家の一室。

「例の娘が町に入ったみたいだね。」

足を組み換え、ボトルの酒をコップにつぎながら話す女。
その狭い部屋には十数人の男たちが棒立ちになり、女の話を聞いていた。

「いいかい…しくじるんじゃないよ！」
女は冷たい目をしていたが、その瞳の奥はギラギラとしていた。

「へい！」
そして男たちはぞろぞろと部屋から出て行った。
どいつもこいつも、どこか普通と違う、いかにも野蛮そうな連中だった。

＜ウォーロッセオ中心部・闘技場前＞

「大きいな～…」

大都市の球場と同じくらいある大きな円形の建物を下から見上げ、

マモリは大きな亀みたいだなどと考えていた。

「世界中でも有名なウォーロッセオの闘技場よ。毎週いろんな大会が行われるの。賞金も出るのよ！だからこの町には腕自慢や賞金目当ての人がたくさん出るの。」

「へえ……ガメイラって本当に物知りだね。」

目の前の建物と回りの強そうな人々、それとガメイラの情報が一致しており、マモリはようやくガメイラの知識を信用することにした。

「マモリちゃんも出てみたら？」

「何言ってるんだよ。俺がここに来たのは別の目的が…」

「うふふ、わかってるわよ。ただ今の可愛いマモリちゃんの姿をたくさんの人に見てもらうチャンスだと思って。」

「……なおさら出る気なくなったよ。」

そんなたわいもない話を胸のペンダントとしているマモリは、回りからはきっと電波少女だと思われてるだろう。

ふと正面を見ると、マモリと同じくらいの少女が歩いて来るではないか。

フリフリの可愛らしいワンピース。

ショートボブの金髪。

手には花瓶の様なものを大事そうに抱えている。

「…可愛い…」

ついそう呟いてしまうマモリ。

その少女に見とれていると、あり得ないことにその少女が突然現れた男に襲われはじめた。

「キャーーー！」
「ぐへへっ、可愛いなお嬢ちゃん。お兄さんと一緒に遊ぼうや」
お兄さんと言うにはあまりにも無理のあるその男は、少女の腕を掴み、ひょいっと持ち上げた。

「ええ！？」
そんな馬鹿なと言いたいところだが、現に起こっているのだから仕方ない。
「…しょうがない、ほっとけないよ！」
マモリはイージスを召還し、剣と鎧を装備する。

「…おい、その子を話せ！」
あまりにも突然な出来事だったが、日頃魔物に襲われてる人を助けるのが日課のマモリにとっては、日常と変わらない行動である。
その声に男と少女がマモリを見る。

「おお！もう一人可愛い子がいるじゃねえか！今夜は両手に華…」
まあ手を放さないだろうと思っていたマモリは、男が言い終わる前に動き、剣を振る。

「おおっ！」
男が慌てて手を放す。
少女はその勢いで倒れ、花瓶が割れてしまった。
マモリはまだ用があるのかと言うように、男を睨む。
男は居たたまれなくなり逃げてしまった。

「ふう、大丈夫？」
少女に手を差しのべる。
少女もその手をとり、立ち上がった。

「ありがとう…。…でも、花瓶が…」
「え？ああ、ごめん。…大事な物だったの？」
「そういうわけじゃないけど……う、うぅ…」

少女は泣き出してしまった。
おろおろと慌て出し、言葉に詰まるマモリ。

「お母さんが病気で…でも病院に行くお金がなくて…この花瓶を売ればそのお金ができるはずだったの…」

またしてもそんな馬鹿なと言いたい展開だが、少女の涙を見ては何も言えない。

「…せめて私が大会に出て…賞金を貰えるくらい強かったら…」
泣きながらとんでもないことを言い出す少女。
どう見ても大会に出て闘うなんて無理そうだ。

「このままじゃ…お母さん死んじゃう…」
少女の目から涙がボロボロとこぼれ落ちる。

「わかった…俺が大会に出るよ…。だから泣かないで…」
「…本当？」
まるで少女に丸め込まれたようになってしまったが、マモリは他に泣き止ませる方法が思いつかず大会に出ることを決意してしまった。

「いいの、マモリちゃん？」
「だってしょうがないじゃないか…ほっとく訳にもいかないし、病院の治療費なんて持ってないんだから…」
「マモリちゃん…将来苦労しそうね。」

ガメイラは心からマモリの将来が心配になった。

使用禁止

少女が言うには今回の大会の賞金は１００万マネィらしい。
治療費を払ってもお釣りが来る額だ。

「武闘大会か…ってこれ、武器の使用禁止じゃん！！」
闘技場に貼ってあるチラシを見て、マモリはがっかりする。
元々マモリには格闘する力も技術もないし、戦闘力が上がる装備も今はイージスだけだ。

「大丈夫、あなた強いでしょ？さっきの動き、凄かったもの。それに女の子なんだからきっとみんな油断するわよ！」
「ははは…（女の子じゃないんだけど…てか生身じゃすごく弱いし…）」
実際は女の子ではないのだが、ミニスカートで自分は男だと言っても変態扱いされるだけだと思い、この場は黙っていた。
それはその少女が可愛らしい子だったためでもある。
そういう理由もあって、結局明日の武闘大会に参加することになってしまった。

「私はラミア。じゃあ明日この場所で会いましょう。」
ラミアと名乗った少女はそのまま走り去ってしまった。

残されたマモリは大きな溜め息をつく。
もともと黒ローブの老人を追って来ただけだったマモリは、これだけ面倒なことに巻き込まれるなんて思っていなかった。

「…はぁ、何でこんなことに…」

＜ウォーロッセオ・武器防具店＞

闘技場で有名な町だけあって、店には結構お客さんが入っていた。

「えぇ、ないの！？」

「ごめんね。でも女の子でも装備できる格闘用のグローブなんて聞いたことないからねぇ」

明日の武闘大会は武器の使用禁止。そのためマモリは素手と認定される武器を探さなければならなかった。

格闘用の武器でフルアーマーを使えば、マモリは格闘の達人になれるからだ。

むしろそうしないとマモリに勝ち目はない。

「うぅ、これじゃ大会に出れないよ…」

「そもそも出る必要ないと思うけどね。マモリちゃんは人が良すぎよ。…それに確かに素手の女性用なんてなかなかないわよ。少なくとも武器やとかには…」

半べそかきながら店を出ようとすると、ガタイの良い青年にぶつかった。

「あ、すみません！」

「…いや。」

マモリは小さくお辞儀して店を出て行った。

マモリとぶつかった青年は不思議そうにマモリが出て行く様を見送った。

「（…可愛い子だな…あんな子がどうしてこんな所に…？）」

「ジャン！例の物仕上がってるぞ！」

「あぁ！サンキュー！！」

ジャンと呼ばれた青年は店長から頼んでいた品物を受け取った。

店長が青年をジャンと呼んだ途端、周りがざわめきだす。

「…おい、ジャンだ…」

「本当だ…やっぱり明日の大会の…」

「こりゃ明日が楽しみだぜ…」

「あぁ、特にジャンとブライのカードは絶対見逃せねえ！」

店内で自分のことでざわめきが起こるが、ジャンはそれを気にも留めず店長との会話を進める。

「衝撃吸収ボディスーツ！打撃ダメージを和らげる他に耐火性・保温性にも優れておるぞ！」

「ああ！さすがだな！これで明日は思いっきりやれる！…ところで店長、さっきの女の子…明日の大会に出るみたいなこと言ってたけど…なんなんだ？」

「あ～、なんでも明日の武闘大会に出たいそうでな、女性用の素手装備品を探してたんだ…。うちにはそんな物のないって言ったら出て行ったよ。まああんな娘が大会に出るなんて無茶だ……出ても予選ですぐ落とされるだろうしな。」

「…ふ～ん…あんな可愛い子がねぇ…」

ジャンはもう一度、マモリの出ていった方向に目を向けた。

＜ウォーロッセオ・武器防具店外の小道＞

「…どうしよう…フルアーマー使わずに出たら俺なんて一瞬でやられちゃうよ…きっと首ねっこ積まれてキュッっとかいってそのまま捻り殺されちゃうんだ…」

涙目になってとぼとぼとアテもなく歩く。

「大丈夫よ。あそこの大会は今は殺しご法度のはずだから。」

「昔だったら殺されてたかもってこと！！？」

「まぁ、それにその場合は予選で落とされて終わりだから。諦めたら？」

「う～…でもあのラミアっていう女の子と約束しちゃったし…母さんも女の子との約束は絶対守れって言ってたからなぁ…」

「…アイリなら言いそうね…。でもそんな格好で出たら、屈強な男たちに慰みものにされるわよ？」

「なぐさっ！！それだけは嫌だ～！！」

すっかり弱気なマモリをからかうガメイラ。

そこにさっき出てきた店から男が追って来た。

「おーい、お嬢ちゃん！」

「…」

「…マモリちゃん、あなたのことだと思うわよ？」

「え？」

ガメイラに言われるまで、その呼び掛けが自分のことだと気づかな

かった。

「…何か用？」

「あぁ、君、女の子用の格闘グローブなんかを探してるんだろ？さっき店で店長と話してるの聞いちゃったんだ！」

その男はとても優しそうな顔立ちをしていた。

「それならこの通りの先にあるリキュールって酒場に行くといいよ。そこの女マスターが格闘オタクでさ、何か持ってるかもしれないよ？」

「え！？本当に！？」

「ああ、日が暮れたら店開くから、行ってみなよ。」

「はぁぁ、ありがとうお兄さん！」

マモリは目をキラキラさせ、男に抱きつきそうになった。

＜ウォーロッセオ・酒場リキュール＞

日が暮れた頃、マモリは言われた酒場へ来てみた。

その酒場は町の中心部からはかなり離れた所にあり、人通りもほとんどない場所にあった。

マモリはまだ１６歳。お酒を飲める年齢ではないし、酒場なんて場所もスタートロイで母に付き合わされて行ったことがある程度。一人で入るのは初めてだった。

「ここか…なんか緊張するな…」

「マモリちゃんが…明日を待たずして野蛮な男たちの慰みものに…」
「変なこと言うな！！」

ガメイラに突っ込みを入れつつ、その存在が一緒にいてくれると思うと、マモリは安心できた。

そして酒場リキュールの扉を開く。

フレイ・バーバリア

＜酒場リキュール＞

店の中はたくさんの男が楽しそうに飲んで騒いでいた。
マモリが依然母と行った酒場と同じような活気だったので、マモリはそれほど緊張せずに店の奥へと向かうことができた。
奥には一人の女性がカウンターの中で立っている。
美人というよりは格好いいイメージの若い女性。

「あら、いらっしゃい。」
「…どうも。」
「お嬢ちゃん一人で来たの…？」
「お嬢ちゃんじゃないんだけど…」
「あら、そうなの？」

マモリもさすがに店の奥まで行き、カウンターに座ると緊張せずにはいられなかった。
自分のような子どもが一人で来るところではないと改めて思った。

「まあいいけど…お酒はだせないわよ？」
「あ、いいよ！…ちょっとお姉さんに聞きたいことがあって来たんだ！」
「聞きたいことね…まあそんなところだと思ったわ。あなたみたいな子が一人で来る理由なんて他に無いものね。」
「（そういうものなんだ…）」
「…それで、何が聞きたいの？」

そう言いながら女性はマモリにピーチジュースを出した。

きっとマモリの髪の色や雰囲気から読み取ってのチョイスだろう。
その気遣いが伝わったのか、マモリも少し安心してそのジュースを飲み、女性に店に来た訳を話す。
女性が格闘オタクだと聞いたこと。
何かそういう道具を持っているんじゃないかということ。

「…そうね、確かに私は格闘好きで、自分でもしたりするわ。その時に使ってる物でいいならあげられるかもしれないわね。…ちょっと探してくるわ。」
「ありがとう！」

女性はすぐに戻ると言って店の奥に入っていった。

「なんとかなりそうね…。」
「うん！いい人そうで…よか…っ…」

マモリは急に眠たくなり、意識が薄れていった。それをここ数日のドタバタの疲れが来たのだとマモリは思った。
そのままカウンターにつっぷして寝てしまった。

＜酒場リキュール・数分後＞

「……」
なんだか体がダルい。
うっすら目を開けるマモリ。まだ店の中らしい。

「……うぅ……」
体が動かない。椅子に座らされ、手足を縛られているようだった。

「目が覚めたみたいだねえ…」
さっきのお姉さんの声が聞こえる。
マモリは今の状況を冷静に考えてみた。
考えてみたところ、どうやらピンチらしい。

「…どういう…こと？」
とりあえず聞いてみた。

「見ての通りだよ。って言ってもわからないか…。いいかいお嬢ちゃん、私の名前はフレイ。フレイ・バーバリア。」

どこかで聞いたような名前だった。
マモリは最近の記憶を必死に思い出していく。そして一つ、似たような名前を記憶の中に見つけた。

「…あ…山賊！？」
「おや、わかってくれたみたいじゃないか。その通り、私は山賊バーバリ団のリーダーさ！…カウロイ村では私の子分が世話になったみたいだからねぇ、あんたのことずっとマークしてたんだよ。」

マモリは山賊のことを思いだし、目の前の人間が決して優しく気のいい人ではないと理解した。
そして騙されたことに凄くムカついた。

ふと、胸にガメイラがないことに気づき、回りを見回した。

「あのうるさいペンダントかい？あれならここにあるよ。」

マモリの様子に気付いた女ボス、フレイはガメイラを手に持って見せつけた。

「何なの、これ？使い魔でも入ってんの？ずっとマモリちゃんマモリちゃんって叫んでたわよ。なぜか今はおとなしいけど。」
そう言われればマモリもガメイラの構造をよくわかっていなかった。だが今はそんなこと言ってる場合じゃない。

「なんで…こんなこと！？」
「あら、言わなかった？子分が世話になったから、そのお礼よ。さああんたたち！好きにしちゃっていいよ！」

回りがざわざわとざわめき出す。突然の状況でマモリは忘れてしまっていたが、店の中にはたくさんの男客がいたのだ。
それがすべて山賊バーバリ団なんだと、今更になってわかった。

「へへへ…やっとこの子を可愛がれるぜ！」
「俺もう限界だよ！」
「さあて…何からしてもらおうかな？とりあえず俺のを…」
「待てよ、俺が先だ！」

男たちが狂ったような目でこっちを見る。
よく見れば昼間この店のことを教えてくれた優しそうなお兄さんも混ざっていた。

「ちょっと待ってよ！俺男だぞ！！？」
「はぁ？そんな嘘信じるわけないだろう？」
ダメだった。

マモリは男としてかつてない危険を感じた。

…このままじゃ…男じゃなくなる…
「フルアーマー・イージス！」
体は縛られたままだが、イージスを使えばなんとかなる！そう考え、マモリはイージスを召喚した。
マモリの服も、胸当て、ミニスカート、ニーソックスに変わった。

「今だよ！」
フレイが叫ぶと、後ろの男がイージスを奪った。腕の縄を切るのが間に合わなかったのだ。

「え…そんな！」
「ごめんね～…カウロイ村であんたが変身して武器を持ったとたんに強くなったって聞いてたからさ。とりあえず武器は預からせてもらうよ。」
フレイのニヤニヤ笑いはマモリを一層ムカつかせた。

「本当に変身しやがったぜ！」
「うおー、生着替え見ちまった！一瞬でわからんかったけど！」
「しかもさっきよりやらしい格好になったぞ！やる気じゃねえか！」
だが事態は悪化したようだった。
男たちの顔つきもさらに凶悪になったように感じる。
そして数人の男たちの手がマモリのお尻や太ももを触り出した。

「ぁあっ！」
思わず声を出してしまった。

「感じてんのか！？」
そう言われてマモリはショックを受け、同時にものすごく恥ずかしくなった。

男としてのプライドを自分で傷つけたような気がしたのだ。
こんな格好をしておいて今更プライドもないのだが、気持ちだけでも男らしくと思っていたマモリにとって、こうして男たちに触られるのは屈辱だった。
マモリは情けなくて泣きそうになってきた。

男たちの手は容赦なく体をなで回し、とうとうスカートの中に入ってくる。
マモリももうダメだと思った。

ドゴォン！！

その瞬間、後ろの方向から大きな破壊音が聞こえた。

その場にいた全員がそちらの方を見る。

鍵をかけていたはずの酒場の扉が粉々に粉砕されており、そこに一人の青年が立っていた。
マモリはその青年をどこかで見たことがあるような気がした。

火拳・イーフリート

粉砕した扉を背にその青年はマモリたちの方へ近づいていく。
店内にさっきまでとは明らかに違う空気が広まり、山賊たちの意識がジャンに集中する。

ある者は目をギラつかせ、今にも青年に殴りかからんとしている。
またある者はその顔を見て、体を震わせ、後退りしている。

そんな空気の中、沈黙を破ったのは酒場の女主人にして山賊のリーダー、フレイ・バーバリアだった。

「あんた…格闘家のジャンだね？私もあんたの噂はよく聞くよ。…で、有名人のあんたが私の店壊してくれちゃって…いったい何の用かしら？…まあ何の用でもただでは帰さないけどね！」

フレイは眉間をヒクヒクさせながら、怒りを抑えながらジャンの様子を伺っている。
対するジャンは無言のまま進み、山賊たちの群れの前で立ち止まった。

「…この野郎…やる気か！」
「いいところで邪魔しやがって…ただじゃすまさねえ！！」
「ぶっ殺してやる！！！」

月並みな脅し文句をたれる山賊たちに一瞬ガンを飛ばし、視線をマモリに移す。
マモリもそのジャンの方を見ていたため、自然と視線が合う。
ジャンはマモリに向かってニッコリ微笑んだあと、目を尖らせ、拳

を作り、腰を落とした。

「っ！！あんたたち、気をつけな！！」
フレイが慌てて声を上げる。だが言うのが遅いのか、ジャンが早いのか、そこで小さな竜巻が起きたように数人の山賊が吹っ飛んだ。

ジャンはその勢いに乗って山賊を蹴散らしながらフレイの目の前まで来る。
あまりのスピードにフレイも警戒するのが遅れた。
「うがっ！」
ジャンはフレイを軽く小突き、持っていたペンダント、ガメイラを奪い取った。
フレイは体勢を崩し後ろのバーカウンターの中に倒れてしまう。

ジャンはマモリの方までゆっくりと歩いていく。
一連の動きを見ていたマモリの周りの山賊たちは、マモリに触れている手を引っ込め、後ろに下がってゆく。

「これ、君のだろう…？」
そう言ってジャンはガメイラをマモリの首にかけた。

「え……あ…ありが、とう…え…？…なんで！？あんたっ…」

事態が飲み込めないのは山賊たちだけでなく、マモリも同じだった。
何が起きたのか、目の前の人物は何のために何をしているのか、さっぱりわからない。
そんな混乱の中マモリにも一つだけはっきりしていることがあった。

「…助けて…くれたの？」
「まあ。」

ジャンはそう言ってマモリの縄をほどいていった。
次に声を出したのはさっきまで無言だったガメイラだった。
「はぁぁぁ…マモリちゃん大丈夫！？危ないところだったわね…まさか本当に慰み者にされるなんて…。」
口に貼られていたガムテープをはずしてあげたように、勢いよく喋り出すガメイラ。
「うわっ！」
その声を聞いて驚いたのはジャンだった。
まあ突然ペンダントが喋り出せば当然のリアクションだが、さっきまで余裕の顔で山賊を薙ぎ払っていたのを思い出すとギャップを感じてしまう。
「あなた、マモリちゃんを助けてくれてありがとう。」
「…いや……」
自分に声をかけてくるとは思っていなかったので、ジャンはたじろいだ。ペンダントに話しかけられたのは人生で初めてだったからだ。
その「いや」という言葉で、ようやくその男が昼間出会っていたことをマモリは思い出した。
「武器屋さんにいた人！！」

「…ああ、覚えててくれたんだ！」

一方倒れたフレイ・バーバリアはそのままバーカウンターの中でごそごそと動き、立ち上がった。
その動作にまだマモリたちは気づいていない。
「あんた…ジャンっ！よくも…！！」
フレイは左手を前にかざした。さっきまではつけていなかった真紅

の手袋を着けている。
その手袋がさらに赤く光り出した。

「危ない！マモリちゃんイージスを！！」
ガメイラが魔力を察知し、声を荒立てて叫んだ。
マモリもその声に反応する。さっきの山賊が落としたのか、落ちていたイージスを急いで拾い、柄の宝玉を前にかざす。

すると宝玉から半透明の大きな盾が現れた。
マモリとその後ろのジャンをすっぽり隠せるくらいの大きさの盾が。

盾が現れるとほぼ同時に、フレイの手から炎が噴出される。特大の火炎放射器のように。
「燃えちりな！！」
その炎はまっすぐマモリたちに向かい、イージスの盾にぶつかった。
ジャンは驚き、マモリの後ろで熱さをしのいでいる。

「炎魔法…？」
「いいえ、これは炎魔法じゃない…騙されてこんなことになっちゃってるけど、あの女が格闘オタクっていうのは本当みたいね！」
「どういうこと？」
「…あの女が手につけてるグローブあるでしょう？あれは火拳・イーフリート…。昔ある格闘家の娘が愛用していた格闘用の手袋なの。より強い拳を、そう思って特別に作らせたのがあの手袋よ。もうその娘は死んじゃったらしいけど、それからあの手袋は伝説の拳として伝えられたわ。その娘の格闘への熱い思いが宿って炎を出すようになったのよ。そんなレアアイテムがこんなところにあるなんて…」
「…えと、つまりあれって格闘用の武器ってことだよね！？」
「そういうことよ！」
「じゃあ…あれを手に入れたら…」

「ええ、マモリちゃんも格闘技ができるようになるわ！」
ギリギリで炎を凌ぐマモリたち。だが炎の威力が弱まっていく。
「熱っ！！くそ！！」
フレイは炎の噴射をやめた。
手袋、イーフリートはまだ燃えたいというように、なおも赤く光っている。

「っ！！しめたわ。あの女、ちゃんとイーフリートを扱えてない！あれは魔力でうまくコントロールしないと自分も燃えちゃう危険なアイテムなのよ！」
なんとも恐ろしい手袋だろう…マモリはそんな物を使おうとしてたのかと身を震わせた。
「それ大丈夫なの？」
「何言ってるのよ…そのためのフルアーマーでしょう？」
それもそうだと思い、マモリは納得した。フルアーマーはどんな装備でも自在に使いこなせる魔法だ。
思えばさっきのイージスの盾もとっさにしては強力な盾を作り出せたと言える。
マモリもはじめてだったが、あれが本来の守護の剣と言われるイージスの力なのだろう。

フレイは再びイーフリートを装着し、炎を噴射する。
「今度こそ！灰になりな！！」
それを再びイージスの盾で防ぐマモリ。
フレイが炎の噴射を止め、また攻撃してくるまでの時間は5秒といったところだった。
「これじゃどうしたら…俺のスピードじゃ炎がおさまってる間に手

袋を脱がすなんてできないよ…」
「確かに…難しいわね。」
策が思い浮かばない。そう思っているところに割って入ってきたのはジャンだった。
「よくわからないけど…あの手袋を奪えばいいんだな？」
「え？」
マモリがジャンの方を見た時、すでにジャンはイージスの盾から飛び出し、フレイの方に突っ込んでいっていた。

チャイナドレス

炎は依然として熱く燃え盛っていた。
どういう訳か周りの木製のテーブルや椅子には燃え移っていなかったようだが。
しかしその熱気は本物で直撃すれば確実に燃やされてしまうだろう。
ジャンはそんな炎が燃え盛る中、ギリギリのところで炎に当たらないようにフレイに近づいていく。

「く…！アッ…！」
フレイはジャンの行動に気づいていなかった。
視界に入っている炎が大きすぎたことと、そのため光でしっかりと目をあけることができていなかったからである。
ジャンはそれも見越して極限まで炎に近づいていたのだ。
やがて炎の勢いが小さくなっていく。

炎の勢いが小さくなると同時に、フレイの視界にジャンが入っている。
あまりにも近くにいたことにフレイは驚きを隠せなかった。
焦りからか、無茶な攻撃をしてしまったと思ったが、すでに手遅れだった。

「さすが…耐火性！！…これ、もらうぞ！」
ジャンのボディスーツは特注のもので、耐火性に優れたものだった。
ジャンはフレイの左手を掴み、火拳イーフリートをはぎ取り、そのままフレイを部屋の隅に投げた。

「っ！！！」

テーブルとイスにドカッとぶつかり、フレイはかなりの痛手を負ってしまった。
だがフレイはまだ怒りもやる気も衰えてはいなかった。
「くっ…あんたたち！！いつまでもぼさっと見てるんじゃないよ！全員でかかりな！！！」
ここぞとばかりに声を張り上げるフレイ。
その狂気に対応して、さっきまで傍観していた山賊たちが動き出す。
「…絶対許さないよ！八つ裂きにしてやる！！」
「うわ！お兄さん、早くそのグローブをこっちに！！」
マモリにはイージスもあったのだが、さっきのイーフリートの力を見て、一気に片づけてしまおうと考えたのだ。
「ああ！！」
ジャンはマモリにイーフリートを投げた。
イーフリートを手にしたマモリは、さっそく魔力を込める。
一瞬、あぁ…また恥ずかしい格好になるのかも…そう思ったが、明日には必要なのだから今考えても結果は同じだと思い、フルアーマーを使うことにした。
「フルアーマー・イーフリート！！」
マモリの体が赤く光る。さっき見たイーフリートの光だった。
次の瞬間、マモリはまた別の姿になった。

リーダーのフレイ、山賊たち、そしてジャンもその変身シーンに意識を奪われてしまっていた。

左手には火拳・イーフリート。右手にも同じデザインのグローブ。
胸から膝上にかけては一枚の布を体にピッタリと巻きつけたようなワンピースとも違う服。
その服は太ももものところに切れ目が入っている。
綺麗なピンク色のセミロングはアップにされ、頭のてっぺん両サイドでお団子にされていた。
それはいわゆるチャイナドレスというものだった。

チャイナドレスという服の構造は、実際のところカンフーに絶対向いていないだろう。
だがマモリの魔力とイーフリートが選んだといえるこの服が、マモリの格闘スタイルだったのだ。

「え…？ちょ！これっ！！？」
その布の少なさに戸惑いを隠せない。
確かにスリットのおかげで足技も使えそうだが、そんなことをしたら中が見えてしまいそうだった。

「マモリちゃん…それはちょっと男の人を誘惑しすぎじゃないかしら？」
「知らないよ！俺がイメージしたわけじゃないんだから！！」
実際にどこの誰の意図によってフルアーマーの装備が決まるのかは定かではない。
ただこの格好がイーフリートを扱うのに一番適している、そう言わざるを得ないのだった。

「おまえ…その格好は？変身した？」

戦いを中止してマモリに興味を持つジャン。
さっきから何がどうなってるかわからない。
なぜこんな場所で男たちに襲われてるのかもだが、変身にはさらに混乱させられた。

そもそもジャンの方こそ、なぜこの場に来て助けてくれたのかもマモリにとっては謎なのだが。

「これは装備した武器を自在に使いこなすフルアーマーって魔法なの。まぁ見てなさい！今からのマモリちゃんは凄いわよ！」
ジャンは再びペンダントに話しかけられ戸惑った。
目の前の女の子の何が凄いのか、それが強くなったという意味だとすれば信じられない。
ましてやそれを言ってきたのが本人でなく一介のペンダントなのだから。

だが、ジャンはその後自分の目を疑うことになる。

「お前ら…さっきはよくもやってくれたな！…ベタベタベタベタ…すっっごく気持ち悪かった！！」

マモリの両手両足が炎に包まれた。

そしてマモリの体が宙に浮く。いや、浮いたのではなく跳んだのだ。
しなやかに、華麗に、マモリの体は上空に舞い、山賊の群れの真上で体勢を変えた。

＞ｉ３５５２７―４３２０＜

「ハィア！」

炎の足が一人の山賊の顔面を蹴る。その山賊は壁まで一直線だ。何人かの山賊を道連れにして。
着地したあと後ろから来る攻撃を、これまあしなやかに避け、懐の入り込んで腹部に強烈なストレートを叩きこむ。
すぐさま新体操のように足を後ろに突き上げ、後ろの山賊の顎を砕いた。
その山賊は恐らくマモリのドレスの中身を見てしまっただろうが、記憶には残らないだろう。

「つぎっ！！」

そうやってマモリは次々と山賊をノックアウトさせていった。
それは格闘家というよりはまるで踊り子のようでもあった。
両手両足の炎がそれをさらに美しく見せている。
見たところノックアウトされた山賊は小さな火傷はしていても、燃やされるような者はいなかった。
どうやらイーフリートは炎を出してもその熱量や燃焼をコントロールできるらしい。

ジャンはすっかりマモリに見とれてしまい、動けなかった。
それは男としてではなく、一人の武闘家としてである。
ジャンは自分が武者震いをしているのを感じていた。

ジャンは自分の視界の中で、フレイが動き出したことに気付いた。
立ち上がり、隠し持っていたナイフをマモリに投げようとしている。
自分の子分に当たるかもしれない…そんなことを考えてる余裕はもうないのだろう。

「くそ…こんな小娘に！！」
フレイはナイフを振り上げた。
マモリは気付いていない。

「ちぃ！」
ジャンは全力で足場を蹴り、フレイの方へ突っ込んだ。そしてフレイの目前でもう一度踏み込み、肘鉄を食らわせる。
腹に信じられない衝撃がはしり、フレイはそのまま気を失った。

マモリの方も山賊を一人残らず気絶させていた。

＜ウォーロッセ・宿屋前＞

「今日はありがとう。…でも、なんで俺を助けてくれたの…？」
「あぁ…昼間見た時に可愛いなって思って…それに明日の大会に出るみたいなこと言ってたから気になったんだ…それで探してたらあの店に入るのを見たって聞いたから。」
顔を赤くしながら言うジャンに、マモリも恥ずかしくなった、

「マモリちゃん…赤くなってるわよ？」
「ちょ！そんなわけあるか！俺は男なんだから！可愛いとか助けられたとか、そんな…」
「え？」

一瞬沈黙した。
マモリも隠すつもりはなかったが、恩人に変態だと想われると焦っ

てしまう。

「あ、…えと、今はこんな格好してるけど…ちゃんと体は男で…呪いかけられちゃってて…この格好は仕方なくって言うか…！！」
慌てて事情を説明するマモリ。

「こんなに可愛いのに…本当に…男なのか？」
「…うん。」
「…失恋かしら。」

ジャンはしばらく黙っていたが、何故か笑い出した。

「そうか！男なんだ！確かにあの強さ！！それなら納得できる！明日の大会に出るっていうのも！！…そっか、男だったのか！見た目で判断してたなんて、俺もまだまだ修業が足りないな！」
まだ少し勘違いがあるようだったが自分なりの考えで納得するジャンに、マモリは呆れていた。

「俺、最初は気に入られたくて助けたんだけど…さっきの見てお前と戦いたいって思ったんだ！」
「……え？…」
「男って判って安心したぜ！これで明日はお前と思いっきり戦えそうだ！」
「はあ…」
賞金が必要なマモリにとって、ジャンの存在は全く嬉しくなかった。

「そうだ！まだ名乗ってなかったな！俺はジャンって言うんだ！」
「俺は…マモリ。」
「マモリか！うん、明日はよろしくな！可愛い顔したって駄目だからな！俺は本気でお前を倒す！」

なんだかいつの間にか熱血モードに入っていて、マモリはついて行けなかった。

「じゃあ明日な！」
そしてジャンは走っていく。

「なんだか…頭の悪そうなのに目をつけられたわね…」
「うん…でもいい人だよ。」

そうして夜は過ぎ、大会の日が訪れる。

武闘大会開始

＜ウォーロッセオ・闘技場＞

武闘大会当日。

闘技場ではＡとＢの会場に別れて予選が行われていた。
マモリは参加登録を済ませ、Ａブロックの会場に向かうところだった。
登録の際、受付の女性から「こんな女の子が…？」というような目で見られた。
しかし昨日会った少女ミアが、―女の子なんだから、みんな油断するわよ―と言ったのを思い出し、それが優勝への近道だと思い、不本意ながらも女の子と思わせて油断を誘おうと思ったのだ。
実際マモリは賞金でラミアの母親の治療費を稼ぐという目的があって、腕試しなどと言う名目は一切ないのだから。

都合の良いことに、マモリ以外にも女性の参加者は結構いたようだが、マモリほど若く華奢な娘はいなかった。

「マモリちゃん！おはよう！！」
昨日ここでと約束したラミアが声をかけてきた。

「おはよう。」
「わぁ！可愛い！！それどこで買ったの！？すっごくセクシーだし戦う女って感じ！マモリちゃんに似合ってるよ！」
ラミアはマモリのチャイナドレスを見てキャッキャと騒ぎ出した。
マモリはラミアに対しては男とばれて変態扱いされたくないと思っていたので、そう言われて喜ぶふりをするしかなかった。

「あはは、ありがとう。」
「魔法じゃなく気合いで何か出せそうだよね！」
「え…そう？」
ラミアは波〇拳やかめ〇め波のようなものを言っているのだろう。
実際には魔法とは少し違った形で炎を出せるのだから、あながち外れてもいなかった。

「それにそのセクシーなスリット…対戦相手が男の人だったら前屈みになってきっと動けないよ！」
可愛い顔をして平気で下ネタを言うラミアに、マモリは苦笑いで応えた。

「あ、じゃあそろそろ行くね！」
「うん、頑張ってね！！」
マモリとラミアはそこで一度別れ、マモリは予選会場へ、ラミアは客席へ向かった。

「マモリちゃん…」
呼んだのはラミアではなく、胸についているペンダントのガメイラだった。
「ん？何？」
「…いや、何でもないわ…」
「…何だよ…！」
「…ううん、別に…あ、その格好を褒められて喜んでるマモリちゃんが可愛いなって思って！」
「…おまえは俺をどうしたいんだよ…」
その後は何もつっこまず、会場に向かった。

＜闘技場・Ｂブロック予選会場＞

そこに他の選手を圧倒している青年がいた。
ジャンである。

彼は昨日は何事もなかったかのような万全の体調で予選に参加し、あっという間に本戦の出場権を手に入れてしまった。

もともと優勝候補でもあった彼にとって、他の選手なんて目をつぶっていても勝てるといった具合だ。
だがジャンにも気になることがいくつかあった。

「…マモリがいないなぁ、Ａブロックなのか？ということは当たるとしたら決勝戦か…。楽しみだな！」
昨日のマモリの姿を思い出すと今でもワクワクが止まらないジャンだった。

「…でも…ブライがいない。もしブライがＡブロックなんだとしたら、きっと俺と当たる前に２人がぶつかってしまう！！ということは、俺はどちらかとしか闘えないのか！？なんてこった！！」
ジャンは頭を抱えて悩み始めた。予選会場のステージの真ん中、気絶している猛者たちの山の上で。

ブライというのはジャンのライバルだ。最もお互いさほど面識があるわけではないが、その実力が互角と町の人間は判断しており、２人の対戦を心待ちにしているのだ。

＜闘技場・Ａブロック会場＞

予選はＡブロックＢブロックともにステージがあり、それぞれのステージでサバイバルバトルを行う形式だ。
それぞれのバトルで最後まで立っていたものが本戦出場となる。
各ブロック共に２回の予選を行い、２人ずつブロックの代表を決める。

Ａブロックでの第一予選はマモリが到着した時にはすでに終わっていた。
誰が残ったのか見ることはできなかったが、もしもマモリが予選に勝てば、その人が本戦準決勝の相手になる。

「あ～あ、さっきの予選どんな人が勝ったんだろう。見たかったな…」
「あら、相手に興味があったの？この大会自体になんの興味もないと思っていたわ。」
「それはそうなんだけどさ…できるだけ楽に勝ちたいからね。相手のことは知っておいた方がいいだろ？」
「…マモリちゃんって時々すごく冷静になるわね。」
「もともとそのつもりなんだけど…」

そういうわけなんで、自分の予選時間が来るまで近くの人に聞いてみることにした。
１回目の予選でステージの上でのびてしまった人たちの回収にスタッフが手間取ってるようだったから。

「ねえ、お兄さん！」
「ん…？」

片付け中のステージを傍観していた大の男に情報提供を求めるマモリ。
男は急に美少女（のような少年）から声をかけられたと思い、かなりドキッとした。
はたから見れば逆ナンにしか見えない状態だ。

「さっきの試合で勝ったのってどんな人だった？」
「…ああ、さっきの試合な。勝ったのは背の高い女だよ。ものすごい動きでな、全然相手にならなかったよ…」
「相手にならなかったって…？」
「ああ、俺もさっきの予選に出ていたんだ…」
よく見ると男の体はあちこちに痣や傷があった。
「そうなんだ…じゃんよっぽど強かったんだね、その人。…特徴は？」
「そうだなぁ、なんだか全然喋らなくて、目もすわっててて、殺人ロボットみたいで怖かったかも…」
「へぇ…わかった、ありがとう！！」
「どういたしまして、ところでこれから…」

「では、第2予選の出場者の方はステージにお集まりください。」
スタッフの開始の呼びかけがかかった。

「あ、俺行かないと！お兄さんありがとう！」
「えぇぇ！！？君も出るの！？え…！？」
すっかり逆ナンにあっていい気になっていた男は、いろんな意味で驚いてしまった。

ステージの上には自分を含めて15人くらいの男がいた。全員男だった。

最も、他の男から見れば女が一人混ざっているように見えるだろうが。

マモリは左手のイーフリートに包まれた拳を握りしめ、構えをとった。

今回の大会は武器の使用禁止、さらには魔法も禁止のため、炎は使えない。

純粋な肉弾戦の大会なのだ。

周りの男たちも見るからに筋肉の塊のような者ばかりだった。

しかもその男たちはほぼ全員がマモリの方を見ている。

「どうやらお色気作戦は通用しなさそうね…」

スタッフにばれないよう小声で話すガメイラ。

「なんだよその作戦！気持ち悪いこと言うな！…でも、油断を誘うのも無理そうだね。」

「前屈み作戦もね。」

「それはもともと狙ってない！」

そう、これはサバイバルなのだ。サバイバルではその場で最も弱そうな者が真っ先に狙われるのである。

この場合、当然その矢先はマモリに向けられるのだった。

「それでは、開始してください！」

スタッフの呼びかけと同時に男たちがマモリに襲いかかった。

昨日も全く同じような目にあっているため、マモリは自分も男でありながら、つくづく男運がないなと思った。

＜闘技場・観客席＞

「本当にあれで男の子なの？どう見ても女の子じゃない！」
「ふぇふぇふぇ…母の血を強く受けているのじゃろう？とても父親には似てないからの。」
「ふーん、まあいいけどね。私の実験に貢献してくれるんだったら、なんだって。」
「本当にお主は悪趣味じゃのう…」

観客席で怪しい会話を繰り広げる金髪の少女と黒ローブの老人。
その老人は間違いなく、マモリを呪ったあの時の老人だった。

フレイ再び

＜闘技場・Ａブロック会場＞

最終的にステージの上に一人立っていたのはマモリだった。
他の約１５人は気絶しているか動けないでいた。

ステージの上に倒れている出場者たち、スタッフを含めたその場にいた全ての人が、信じられないという表情をしている。
マモリの強さは常識をはるかに超えていたからだ。
それがまだ成人していない少女だったのだからなおさらだろう。

「…えぇ…Ａブロック２人目の代表はマモリ選手です！！」
もしここに観客席があったならば間違いなく歓声が起きていただろう。

ともかくマモリは、余裕で予選を通過した。

＜闘技場・本戦会場＞

予選は闘技場の屋内だったが、円形に作られた闘技場の中心は大きな吹き抜けとなっており、そのこが本戦会場だ。
円形の吹き抜けを囲うように作られた観客席。
そして吹き抜けの中、中心にはロープのない石造りのリングが設置されている。
まあスタジアムではよくある形である。

観客席にはすでに数百人の人間が本戦を待っていた。
実際には準決勝の２試合と決勝戦の計１試合だけなのだから、規模は小さいのだが、それでも郊外から観戦に来る客も少なくはない。
もっとも、その客のほとんどは賭博という楽しみで来ているのだが。

「はぁ、楽しみですな。」
「ええ、魔法も武器もなしの格闘試合は最近ではなかなか見れる機会もありませんから。」

「どの出場者が勝つか賭けをしませんか？」
「いいですとも、私はあのジャンという青年に賭けましょう。」
「おや、本命ですな。」

実は先ほどの予選試合はビデオ実況されていたのだ。
つまり観客たちは４人の出場者を知っている状態だった。
当然、マモリのことも、ジャンのことも。

控え室で待機するマモリは、現在緊張で体を震わせているところだった。

「あわわわ…俺何も考えてなかったけど、この格好でたくさんの人の前に出るんだよね…？」
「そうよ。さっきチラッと見たでしょう？客席の人たち。ざっと８００人はいるわね。」
「そんなに！？…確かにそれくらいいたかも…なあガメイラ！俺こんな格好で人前に出て…変に思われないかな…？」
「今更何言ってるのよ。マモリちゃん今までその格好でたくさんの

人と会ってきたじゃない！」
「それはそうなんだけど…それは別に、普通に話すのは普通っていうか……だって今から会場に出るっていうことはたくさんの人が俺を見るんだよ！？」

マモリは本当に今更自分の格好が恥ずかしくなっていた。
今までは特に自分の格好など気にせず、普通にしていればいいと思っていたからだ。
だが、今回はそうではなかった。
たくさんの人がマモリを見たくてマモリを見る。この事実にマモリはかつてない恥ずかしさを感じていた。

「うわぁ…やっぱり恥ずかしくなってきた…！帰りたい…」
「もう遅いわよ？それに、とにかく優勝するしかないんでしょう？」
「うぅぅ、そうだけど…」
「なら気合い入れなさい！」

「それにこの大会、ただじゃ終わらない気がするの…」
「っ！…それって…やっぱり俺が女装の変態男として名を世界に知らしめるってこと…！？」
「違うわよ！今までだってそんな風に思われなかったでしょ？みんな女の子だって思ってるわよ！」

当初は相手を油断させるために女の子のふりをするのはアリだと思っていたが、今は自分の男のプライドを守るために女の子でいようと決心した。なんとも矛盾しているが。

「そうじゃなくて…この大会、なんだか不穏な空気が漂ってる気がするの。」
「…不穏って…？」

「わからないわ。とにかくマモリちゃんは常に注意しておいて！」
そんなパッと見ひとり芝居のような会話を終え、マモリは深呼吸し、いつも通りにと心に言い聞かせながら会場に向かった。

ワァァァァーーーーーー！！

会場で大きな歓声が響き渡った。
マモリは知らないが、先ほどの予選で圧倒的な強さと可愛さを観客に見せしめたのだから、かなりの人気者になっているのは確実だろう。
実際にいろんな方向からマモリちゃーん！と呼ぶ声が聞こえる。

…やっぱ恥ずかしい…。
マモリは今までちやほやされることがあっても、それはよく知るスタートロイの人たちくらいで、こんな見知らぬ地で見知らぬ人たちに黄色い声援を送られてるのだから恥ずかしくないわけがない。
さっきの自己暗示が早くも解けそうだった。
ただ一つ救いなのは、その声援がむさ苦しい男だけでなく、女の子の声も多数混ざっていたことである。

「紹介が遅れました。Aブロック代表、見た目は可愛い女の子。だけどホントはかなり強い！パワフルカンフーガール！マモリ選手ー！！」
レフィリーが仰々しくマモリを呼ぶのと同時に、会場が震えた。
マモリも苦笑いで手を振りながら石造りのリングに上がる。
「続きまして、同じくAブロックの代表、燃えるような赤い髪に豊

満なボディ、だけどそのスタイルはワイルドコマンドー…」
…さっき予選落ちしていたお兄さんが言っていた女の人だ！
マモリはお兄さんの情報を真摯に受け止め、すでに意識を観客から
まだ現れぬ対戦相手にシフトしていた。

「フレイ・バーバリア選手ーー！！」

「ぅ！！？」
「それって！」
マモリとガメイラはその名前を知っていた。
つい数時間前まで騙されたあげくに体を触られ、しまいには店内で
ドハデな乱闘を繰り広げることになった主犯の名前だった。
ただ、昨日は最終的にジャンにのされ、動けるはずがないのだが…。

会場に現れたのは間違いなくフレイ・バーバリアだった。
フレイは下を向き、暗い雰囲気でリングに上がってくる。
対戦相手のマモリを見て何も言ってこない。それどころか見ようとも
していなかった。

ただ怒りを抑えてるだけだろうか。いや、明らかに昨日とは様子が
おかしい。

マモリもガメイラもそう感じていた。
そしてその感覚は正しかったのだ。

＜闘技場・観客席＞

「さあ、実験を始めましょう…」

マモリとフレイ・バーバリアを見つめ、金髪の少女…ラミアはにやりと笑うのだった。

蜘蛛みたいな

＜闘技場・リングの上＞

「さあ一回戦は美女と少女のレディースファイト！それでは準決勝1回戦、はじめ！！」

ヒュン

審判の開始の合図と同時にフレイが動き、一瞬で間を詰められる。フレイがマモリの目の前に現れたと思ったら、すぐに視界から消えた。

「うわっ！！」

マモリの見てる景色が空を映す。足払いをされたのだ。

それを宙返りして着地する。

「……」

そのスキをつくようにでフレイはパンチとキックの雨を叩き込む。

無言で。そして無表情で。

それをギリギリのところで払い落としていくマモリ。

バババババ！！

「なんだこの動き…この人こんなに強かったの！？」

「……」

フレイは人形のように表情を変えなかった。

「おおっと、まずはバーバリア選手の猛攻です！マモリ選手、おされてます！」

「くそ、これなら！」
「……」
フレイの蹴りをいなすと同時に、体をフレイの方に運び…
ドン！
フレイの体が後方、リングギリギリのところまで吹き飛ぶ。
「決まったー！マモリ選手の見事なカウンターがバーバリア選手のみぞおちにクリーンヒィッツ！！これは立てないでしょう！！」
シュゥゥ…
マモリは今の一撃で終わったと思った。それだけの手応えを感じ相手が女性なのを思いだし心配になったくらいだ。
「マモリちゃん！」
ガメイラが最小限のボリュームで叫んだ。
完全に油断していた。
ドカ！
「そんな…！」
横から来るフレイの膝をもろに受けてしまうマモリ。
よろめいたところを2手3手目が絶え間なく襲いかかる。
「おおっと、バーバリア選手！さっきの攻撃が効いていないのか、起き上ったと思ったらすかさずマモリ選手を滅多打ちです！！どうなってるんだバーバリア選手の体はー！？」

イーフリートで格闘スキルを身につけていなければ、今頃は意識不明か最悪死んでいたかも知れない。
そう思うほどフレイの攻撃は荒く、破壊的だった。
「…やっぱり昨日とは違うわ…！何かおかしい！」
ガメイラの指摘はマモリも感じていた。
強烈な右ストレートを手を組んでガードしたが、吹っ飛ばされてしまった。
「おおっと！今度はマモリ選手がダウンかぁぁ！？」
会場は異変など微塵も感じないまま、２人の攻防に盛り上がっている。
だがマモリには、自分の服や動き、客の反応を気にする余裕が全くなかった。
「はぁ…はぁ……強い…！」
マモリは今、格闘を完璧にマスターとまでは言わないが、かなりの実力者になっているはずだ。
それはこれまでの戦績で誰もが判っていることだった。
なのに押されている…。
マモリはフレイに感じている違和感を確かめたくなった。
「はぁ、はぁ…あんた、昨日あんなに派手にやられたのに…こんなところで何してんの？」
マモリは攻撃に回すエネルギーを、相手の皮肉を考えることに回した。
フレイの精神を揺さぶる作戦だ。
だがフレイの人形のような無言無表情に変化はない。

ババババ！

再び猛襲してくるフレイの攻撃をかすめる程度で避けていく。

「だいたい…俺を痛い目にあわせるすためにセコい手まで使って…それで逆に痛い目見るなんて…情けないよ！」

「…」

「それに…自慢のレアアイテムも俺に…取られちゃって…！山賊が聞いて呆れるね！」

「…」

フレイの無表情攻撃が次第に和らいできた。

「いいわよマモリちゃん！その調子…！」

「あのあともすぐにだらしなく気絶して…お姉さんの山賊って…全然大したことないよね…！」

フレイの手がふるふると震え出した。

もう少し…だがもう皮肉が思いつかない。

次にマモリが絞り出した言葉は、

「それに…俺本当は男なんだ…！なのに俺の方が人気あるみたい…！」

マモリは自分で何を言ってるんだと訳がわからなくなった。

「お・ば・さ・ん！もしかして…俺に女の魅力で負けてるんじゃないの～？」

マモリはできるだけセクシーに言った。
自分の心を降りそうになりながら。

おかげでフレイの攻撃はマモリの顔面ギリギリのところで止まった。

「バーバリア選手、沈黙〜！何があったのでしょうか！私には完全にバーバリア選手が押しているように見えましたが！！？」

ゴソ…
「マモリちゃん、首の裏よ！」
ガメイラの指示を受け、マモリは素早くフレイを髪と首の間に手を差し込んだ。

その手をさっとぬきとって見ると、人にくっついていても目立たない様な灰色の、蜘蛛のみたいなのが手にくっついていた。

次の瞬間、フレイはふぇ？とヤル気のない声を出して膝から倒れ、そのまま気絶した。

審判がフレイの様子を確認する。
「只今の試合の結果…マモリ選手の勝利です！」

オォォォオ！
また会場に歓声が響いた。

止まない歓声の中、マモリは控え室に戻っていく。なんとか恥ずかさにも耐えしのぐことができた。実際はそんな余裕なかったが。
だが最後の言葉は自分で自分にかなりのダメージを与えた。
マモリはそのことを記憶から消すことにし、気になっていたことをガメイラに聞く。

「ねぇ…ガメイラ、あのお姉さんの様子がおかしかったのってこの蜘蛛のせいだと思うんだけど…この蜘蛛のことわこる？」
「いいえ…はじめて見るわ。」
「そっか…」

マモリは、ガメイラでも知らないことがあるんだ程度に思っていたが、ガメイラはこのことを気にしていた。
ガメイラが知らない生物ということは、事実存在しない、もしくは存在が確認されていない、もしくは一般的に公になっていない生物だと言うことだ。
そんな虫が突然現れて、マモリの対戦相手を操っていたとは思えない。

ガメイラはこのことをマモリに言うか悩み、今は黙っておくことにした。

＜闘技場・観客席＞

「あ～あ…やられちゃった！けっこういいできだと思ったのにな。」
その言葉とは反対に、嬉しそうな表情をするラミア。

「ふふ、ゼウの装備が使えなくなってどうするのかと思ったが…まさか少女の格好のままあれほどの力を見せるとは…さすがはフルアーマーの魔法…いや、血かのう」
と言ったのは黒ローブの老人。

「でもいいデータがたくさん取れたわ！まだ実験は続くわよ！」

決勝戦…？

＜闘技場・本戦リング上＞

「さあさあ！間髪入れずにいきますよ！続いて準決勝２回戦！開始！！」

リングの上にいる男の一人はジャンだ。
試合が始まるなり対戦相手に指を指している。

「おいお前！さっきの一回戦は見ていたか？」

ジャンの対戦相手は体が３メートルは越えているだろう大男だ。その筋肉は牛一匹を片手で持ち上げられそうなほどだった。
そんな男がジャンの質問に答えている。

「あ？おぉ、見ていたぞ？」
「あの試合で勝利したマモリというのは、俺の大事な人だ（強さを求める意味で）！」
「は？ああ…そうなのな…？」

突然何を言ってるんだと、会場が静まりかえっている。

「俺は早く…あの子とやりたい（闘いたいという意味で）！！」
「はぁ！！？…や、やりたいのか（性的な意味で）！！？」

会場だけでなく、審判も開いた口が塞がらず、また実況するのもわすれてしまっている。

「だから…」
「…だから？」

「お前は邪魔だっ！！！」
「なんで！！？」

大男がその言葉を言い終える前にジャンは大男の首を絡めとり、その太いのど元に膝を3発打ち込んだ。
そのまま背後に回り、足の付け根を思いっきり突く。
最初の攻撃で意識が飛びそうになった大男はなすすべなく後ろに仰け反る。
ジャンは最後に仰け反った大男の額にとびきりのかかと落としをおみまいした。
そのまま倒れて意識を失う大男。

「…っあ…ジ、ジャン選手の勝利です！！！
最初の発言から最後のかかと落としまでぶっ飛びすぎていて、私もついていけませんでした！！ジャン選手、決勝戦侵出です！！」

オォォォオ！！

＜闘技場・観客席＞

「お前…どっちが勝つと思う？」
「そりゃあジャンだろう！さっきの勝負見たか？あの圧倒的強さ！」
「お…俺はあのマモリって子を応援する…！」

「俺もだ…何だろう、この気持ち…可愛いからとは違う…」
「わかるぞ！これはそう…萌えだ！」

「ジャン様ー！絶対優勝よー！」
「でもあのマモリって子も結構可愛いかも…。私あの子応援しようかな？」
「はぁ！？ジャン様をたぶらかすイモ女じゃない！」

「あれ…？そう言えばブライはどこ行ったんだ…？」
「そう言えば予選の映像にも映ってなかったな…」
「そうだ！俺はジャンとブライの対戦が見たかったのに！！」

観客席では決勝戦が始まるまでの間、観客たちがざわめき続けていた。

「ふふふ。楽しみだわ！」
「ラミアよ…お主はこの大会をどうしたいのじゃ？」
「別に、ただせっかくこんなに人が集まってるのよ？もっと盛り上げなくっちゃ…」

＜闘技場・リング上＞

「お待たせしましたぁぁ！！！それでは本日のメインイベント！言うなればここまではただの余興！！武闘大会決勝戦をぉぉぉぉ始めまぁぁす！！！！！」

オォォォオ！

「その拳の強さは鬼神のごとし！心技体を備えた男！おっと心の方は大丈夫か？先の試合で大胆告白してくれた…この大会の優勝候補！ジャン選手ぅぅぅ！！」

ジャンが大きく跳び、リングに派手に登場する。観声も凄かった。その様子から、このリングに何度も立ってきたことがわかる。

「そして突然現れたスーパールーキー！この美少女が決勝まで来ると誰が予想していたか！？できるなら私と付き合って下さい！！マモリ選手ぅぅぅ！！」

マモリは普通にリングに上がった。
相変わらずの大袈裟な紹介で恥ずかしくなり、顔を上げられないでいる。

「さあ…この2人、どちらご強いのか！？いや、それよりこの2人、どんな関係なのか！！？それでは決勝戦…始めぇぇ！！」

会場全体が興奮状態になる。
だがマモリとジャンの雰囲気だけは興奮状態とはいえず、静かすぎるくらいだった。

「やっとおまえと闘える時が来たな、マモリ！」
「…俺はあんたとは闘いたくなかったんだけど…できれば楽に優勝してさっさと終わらせたかった…」
「何っ！！？マモリは俺と闘いたかったんじゃないのか！？？」
「俺はただ賞金が必要なだけだよ…」

「そうなのか…まあどっちでもいいさ！」
ジャンは少し落ち込んだようだったが、すぐに気を取り直した。
そして高く…それはもう高く高くジャンプした。自分の身長５人分くらいはジャンプした。
「俺を倒さないと賞金はもらえないんだからな！！」
「キターーー！！ジャン選手お得意の空中殺法だぁぁぁ！」
マモリは上空を見上げジャンの攻撃に備える。
その時だった…
ドゴォォォン！
「キャア！！」
「おわあぁ！」
突如マモリの入場してきた方の入口から爆発音が聞こえた。
いや、本当に爆発したのだった。
その近くに座っていた観客の何人が爆発に巻き込まれたようだった。
「な！！？これはいったい何が起ったのでしょか！！？」
審判にも想定外の出来事だったようで、かなり慌てている。
慌てているのはもちろん審判だけではない、他のスタッフ、観客たちも大慌てだった。
当然ジャンは着地して動きを止め、爆発した方を見る。マモリもそうだった。
爆煙が少しずつ晴れていき、一部粉砕している闘技場の石造りの中

から大きな影が現れた。
次第にその影ははっきりとその姿を確認できるようになっていく。
…何…あれ…！？
マモリはその影の正体がはっきり見えても、それがなんなのかわからないでいる。

それは人間のような形をしていた。
頭があり、顔があり、髪があり、その下には首、体、足があった。
しかし腕は４本あり、肘の部分から紫色になっている。
足はあるのだが、明らかに体の大きさに比べて大きすぎる。筋肉が発達しているというレベルではなかった。
一応布の程度の服は着ているようだ。

「きゃーー！！」
「魔物だぁ！！？」
会場が一気に混乱する。
確かに魔物と言えなくもないが、それはあまりにも人間に近すぎる姿をしている。
その生々しさが、さらに恐怖を煽っていた。
会場から逃げ出す者もいた。

「ななななな何だあれはーーー！！こんなのが出るなんて私聞いておりません！！」

人間のような何かは上を向き、大きく口をあけた。まるでうがいでもしているかのように。
次の瞬間、そいつは前を向き、口から光線を出した。
マモリとジャンの間を通って反対側の客席に当たる。と同時に、その客席で大きな爆発が起きた。

「っ！！！」

「ビーームだぁぁぁ！口からビーーーム！！信じられません！この会場内にあんな化け物の侵入を許してしまうなんて！！どうなっているんだぁぁ！！？」

さらに混乱が大きくなる。ほとんどの観客が自分の身に危険を感じ、会場から避難しようと出口に向かっている。
そのため出口はつかえ、観客たちは団子状態だ。

そいつはその団子に標準を向け、またうがいの体勢に入ろうとしていた。

「まずい！またっ！！」
「マモリちゃん、これはかなりマズイわよ！？私の知識の中にもあんな魔物の情報はないわ！！」
「それって…」
「とにかく止めなくちゃ！」
「…わかってる…あんたも手伝ってくれ！！」
マモリはジャンの力が必須だと思い呼びかけた。だがジャンはそいつを見て固まっている。

「…ブ…ライ…？」

ラミアの正体

マモリはジャンを置いてそいつに飛び込んだ。顔に向かって拳をつき出す。
が、４本ある腕のうちの１本で食い止められてしまう。
だがその体勢から蹴りを繰り出し、そいつの顔面にヒット。
直後そいつの口からビームが照射されるが、ギリギリ軌道がそれて観客には当たらなかった。
無理なキックのためマモリのパンツが露になるが、今は誰も見ていないだろう。

いや、観客席にはまだその様子を余裕で観戦してる者たちがいた。

「あはははは！みんなすごい慌てよう！最高ね！あの玩具もなかなかの出来だわ！！…さぁマモリちゃん、その化け物とどんな風に闘うのかしら！？」
ラミアの笑い方はまさに狂喜の笑みだった。
「しかもあのジャンってやつ…私の玩具のこと知ってるみたいだわ。これ最高のシナリオね！！強い有名人で実験した甲斐があったわ！あはははは！」

マモリの活躍により、観客たちは殆ど逃げることができ、闘技場はさっきまでの熱気が嘘のように静かになった。

だがそいつはまだまだ健在で、掴んだマモリをジャンの方へ投げ飛ばす。
「うわっ！」

「ぐっ！」
マモリの体がジャンに直撃した。

「あんた…ジャン！！何やってるんだよ！ぼうっとしてたらやられるぞ！？」
「そうよ。それにこのまま放っておいたらきっと人を襲うわ！さっきの攻撃、明らかに人を狙ってた…」
ジャンの強さは2人ともよくわかっている。だがジャンの様子は明らかにおかしかった。

「……ブライ」

「え？ブラ…？わっ！」
ジャンはマモリを払いのけ、そいつの目の前まで走った。

「！！ブライ！！何やってるんだ！？どうしたんだよその姿！なんでこんな酷いことするんだ！」
ジャンが叫ぶ。

ブライ――この町でジャンと同等の力を持っていると噂される男だった。
この大会でジャンは大衆の前でブライと闘えることを楽しみにしていたのだ。また、その闘いを見たくて来たという参加者も多かったはずだ。
そのブライが大会には顔を出さずに、こんな形で、こんな姿で現れるなんて誰も予想しなかった。現に観客たちは誰一人、この怪物がブライだと気づかなかったのだから。

「おまえ…！俺はおまえと…真剣勝負するのを楽しみにしてたんだ！なのに何やってんだ！？」

変わり果てたライバルの姿に、ジャンは悔しさと怒りが入り混ざったような気持ちだった。
その気持ちを懸命にぶつけるが、ブライは全く反応しなかった。
それどころかか、先の口からビームの狙いをジャンに定めた。

「危ない！！」
動かないジャンをマモリが突き飛ばしたことで、ジャンは燃えカスにならずに済んだ。

「やっぱり…あれは人間なのね？あなたのお友達…？」
聞きにくそうに、ガメイラが聞く。
「あぁ…この大会で真剣勝負するつもりだった…」

また次のビームが来るが、今度はジャンも自分でちゃんと避けた。

「あれが人間だとしたら、戻せる可能性はあるんじゃないかしら？」
ガメイラが言う。
「本当か！？」
「ええ。マモリちゃん、さっきの女山賊のこと覚えてる？…あれは絶対操られてたんだと思うの。」
「うん、あの蜘蛛みたいな虫だよね？俺もそう思ってた。」

作戦をたてているが、ビームは絶え間なく照射されている。避けながらの作戦会議だ。

「ええ。きっとあんな虫があの人にもついてると思うの。それを取り除けば！」
先の闘いで確かにフレイは元に戻った。まあ、「ふぇ？」と言っただけだったが。

その時のように蜘蛛を払いのければ元に戻るというのは誰でも考え付くだろう。

「無駄よ！」

その考えを否定する言葉を吐きながら、金髪フリフリドレスの少女がブライの前に舞い降りた。
それに合わせて怪物ブライがおとなしくなった。

「っ！！ラミア！なんで！？」
マモリは目を限界まで大きくしている。
この街で最初に出会った少女ラミア。
母親想いの子で、自分が大会に参加するための元凶で、できれば嫌われたくない可愛い少女だ。

「な！可愛い！！…いや、無駄ってどういうことだ！？」
この状況が一番呑み込めていないジャンは、突然現れた美少女にどんな感情をぶつけていいのかわからないでいた。

「…やっぱりあなた…変だとは思っていたわ…」
ガメイラはそう驚いた様子もなく、むしろ辻褄が合ったような様子だ。
「やっぱりっつどういうことかしら？」
ラミアは余裕の笑みでガメイラを見つめていた。
マモリもラミアと同意件だ。
「そうだよ！？なんでラミアがここに！？」
マモリは慌てふためいていた。恐らく大体の察しはついているが、信じたくないという気持ちだった。

「ラミアちゃんだっけ？あなた今朝マモリちゃんに会った時「マモ

リちゃん」って呼んだわよね？」
「ええ、呼んだわ。嬉しそうに振り向いてくれるマモリちゃん可愛いかった！」
ラミアは笑顔で答えた。
「どうして名前を知ってたの？昨日の時点でマモリちゃんはあなたに名前を名乗ってはいないわよ！？」
「…そうだっけ？」
マモリもそんなことまでは覚えていなかった。
男女の出会いの中で名乗ったかどうかというのは結構大きな問題な気もするが。
「…そう言えばそうだったかも…失敗しちゃった。でも今更そんなことどうでもいいわよ！マモリちゃんが大会に出てくれれば良かったんだし！！」
ガメイラはずばり言ったつもりだったが、ラミアにとってはどうでも良いことだったようで、その余裕の表情は崩れなかった。

「ラミア…君は…」
「私はね、ある魔法組織の科学者なのよ。マモリちゃん、騙してごめんね。昨日のチンピラさんも私が操ってたのよ。あなたのことはある人から聞いて知ってたのよ。」
ラミアはウィンクしながら茶目っ気たっぷりに謝った。
「つまり、さっきの女の人も…この子も…私の実験動物なの。」

「おい！それより無駄って言うのはどういう意味だ！？どうすればブライを元に戻せる！？」
我慢できなくなったジャン。ラミアをギラギラした目で睨み付けている。さすがに流れを読み取ったようで、完全に可愛さ余って憎さ１００倍だ。
「だから言ったでしょ、無駄だって。」
そう言いながらラミアはワンピースのポケットからごそごそと何か

を取り出した。
それはあの、フレイ・バーバリアの首の後ろについていた蜘蛛のような虫だ。
「じゃーん！これが私の作った寄生虫…タラミチュアちゃんでーす！」
「作った…？」
「寄生虫？」
「そう！この子を人間の首とか頭とかにくっつけたら体内に糸を出して脳を操作しちゃうの！で、私の魔力でその人を好き放題操れちゃうってわけ！！」
「…なんて物を…」
「しかも筋力や反射神経なんかも操れちゃうの！だからこの子に寄生されたらすごく強くなれるのよ。それをこの大会で実験しようと思ったの！そこでフルアーマーのマモリちゃんに協力してもらったのよ。」
「そんな……っ！それであの人…！」
マモリの頭にフレイのことがよぎった。確かに昨日の晩とはまるで別人の動きだった。

ラミアは平然と言い続ける。
「それにこの子は最高よ！時間をかけたからね。体細胞を弄りすぎてこんな姿になっちゃったけど、私の最強で最高の玩具になったわ！」
「じゃあ…元に戻らないっていうのは…」
「もう脳みそぐっちゃぐちゃだし、体も細胞ごと変わっちゃってるからね。もう何をしても一生このままよ。殺さない限りね。」
ラミアは笑顔で決めた。子供のように無邪気な笑顔で。

「可愛いと思ったら、とんだ外道じゃないか！よくも俺のダチを！」
「そんなの関係ないわ。科学に犠牲は付き物なのよ。」

そしてラミアは怪物ブライに呼び掛けた。
「さあやっちゃいなさい！この二人を倒して私のタラミチュアちゃんのや効果を証明するのよ！！」

「ぐあぁぁぁぁぁ！」
怪物ブライがマモリたちに向かってきた。
その巨大な脚で石造りのリングを粉砕しながら。

ジャンとブライ

「……」
マモリは動けないでいた。
この目の前の男が人間であり、まして隣りに立つ昨日の恩人の友達なのだから、攻撃なんてできるはずがない。

なのにその…怪物ブライの巨体がまさかの勢いで後ろに飛んだ。
腹部に強い衝撃を受けたように。
その衝撃の正体はジャンだった。

「情けねえぞブライ！！！」
ジャンの怒鳴りが会場中に響き渡る。

マモリは知らなかったのだ。
ジャンとブライが今までどれだけ拳で語り合ってきたのかを。
出会って喧嘩し、大会でも何度も顔を合わせ、たまには飲み比べ、そんな2人の関係を知らなかった。
まあもし知っていても、むしろ知っていたら余計に驚いただろう。
とにかくマモリにはジャンの行動が理解できなかった。

「おまえそんな蜘蛛に自分盗られちゃったのかよ！そんなに弱い心だったのか！？」
「……」
ジャンの行動にマモリはさっきの闘いを思い出す。確かにフレイは同じように呼びかけることで動きに変化があった。
だが今回はわからない。ラミアは脳みそぐちゃぐちゃと言っていたし。

実際、怪物ブライは依然として凶暴なままだ。むしろその動きが激しくなった。
その大きな足を水平に、バットを振るようにして蹴る。
大木が横から襲ってきたような構図でそれがジャンの体に当たる。
ガードしても体全域を覆ってしまう足に、ジャンはなすすべなく吹き飛んだ。

「痛ぇ！」
そう言いながらもジャンは体勢を整えてすぐに怪物ブライに飛び込んでいる。
今度は両腕を交互に突き出し、頭を狙う。
しかし、相手の腕は４本。
全ての攻撃をブロックされ、両腕を下の２本につかまれたと思ったら上の２本がハンマーのように振り下ろされ、足もとに叩きつけられた。
「ぐはっ！」
怪物ブライはジャンのいる自分の足もとに照準を合わせ、ビームの姿勢に入る。

「まずい！」
マモリはもう見ていられなかった。ジャンをこのまま連れ出そうと思った。
マモリは左腕のイーフリートから炎を噴出し、ジャンたちの方へ飛んだ。
ロケットのように。
そのままジャンを抱えて怪物ブライの股をすり抜ける。
怪物ブライは自分のビームが足元で爆発し、軽くよろけた。
軽くだ。
膝のあたりが少し火傷したようだったが、自滅というほどのダメー

ジは受けていない。

「ジャン！逃げよう！何もジャンがあの人と闘うことないって！」
「マモリちゃん…」
「あの人もう元に戻らないって…殺すしかないって言ってた…。でももしかしたらまだ方法があるかもしれないだろ？一回逃げて考えよう？」
「……ダメだ！」
マモリの説得に耳を貸すかと思えば、ジャンは強くそう言って、マモリを振りほどいた。
「このままじゃあいつはきっとこの町をめちゃくちゃにする。俺はあいつにそんなことさせたくないんだ！」
ジャンの言葉を震えていた。いつも余裕ぶって、何も考えていないようなジャンだが、今はそんな余裕はないのだろう。
「ブライは優しいやつだ。喧嘩が強くて、でも思いやりがある。俺はあいつと闘うのが好きだった。」
真剣だった。遊び心などない。
「きっとブライも俺と闘うのが好きだ。あんな姿になっても、あいつの拳からはあいつの心を感じた。俺と闘うのを楽しんでるよ。」
「でも…じゃあどうするのさ！？」
「このまま闘い続ける。町を壊さなくてもいいように、誰も傷つけなくていいように…俺と闘っていれば、あいつはあいつでいられる。そんな気がするんだ。」
「一生休まず闘うって言うの！？そんなの無理に決まってるじゃん！！」
「無理じゃない！俺とブライは3日間寝ずに喧嘩したこともあるんだ。それがちょっと延びるだけだ。」
3日。一生というにはあまりにも少ない期間だった。
「…本気で言ってるの？」
「ああ！俺は強いやつと闘うのが大好きだからな！」

「…わかった。」
マモリは自分でも何を言ってるんだと思った。
ジャンの闘志にすっかりあてられてしまったのだ。
もしかしたらイーフリートに宿る格闘家の魂か何かがマモリにそうさせたのかもしれないが。
「マモリちゃん…何言ってるの！？」
「大丈夫だよ、ガメイラ。…きっとなんとかなるよ。」
なんとかってどうなるんだろう。マモリは自分でも馬鹿か！と思ってしまうようなことを言ったことにあとから気づいたが、今はジャンの力になりたかった。

「悪いな、マモリ！やっぱりおまえはいいやつだ！」

ジャンは怪物ブライめがけて突っ込んだ。
４本の腕を受け、時々来る大木のようなキックをかわす。
隙を見て全力で拳を突き出す。
「ブライ！やっぱりお前は強いな。」
ジャンの攻撃は本当に効いているのかわからないといった具合だったが、笑っていた。
楽しそうに。
「ぐおおぉあぁ」
「お前と闘うのは本当に楽しい！いくらでも付き合ってやるから思う存分暴れろよ！」

「なんかおもしろくなくなってきたわね…。」
ラミアが望んでいるのは本気の２人と闘って、２人をねじ伏せ、自分の実験結果を出すことだ。
そういう意味では割とラミアの思惑どおりに進んでいるはずだ。

「実験はいい感じなんだけど…何か足りないわね。なんか楽しそうだし…。」

「楽しいんだと思うよ？」

マモリは2人の闘いを見ながら、言葉をラミアに向けた。

「ジャンは楽しそうだ。本当にああやって闘うのが好きなんだよ。」

ジャンは確かに吹き飛ばされながら、怪我しながら、でも笑いながら闘っていた。

「…だからどうしたのよ！？どうせその大好きな闘いももうすぐ決着がつくわ。そしたら今度はマモリちゃんの番…」

「…きっと彼はジャンがなんとかしてくれるよ。だってあの2人、友達みたいだから。」

そういってマモリはラミアの方に踏み出した。

「何よ！」

「…俺は君を許してあげられないみたいだ。あの女山賊のことも、ジャンの友達のことも…。」

「だから何？」

「ラミアとは、友達になれそうもないや。昨日会ったときは可愛いなって思ったんだけどね…。でも君を殴るなんてできそうにない…。だから、あの人を連れてこの町から出て言ってほしい。」

「はぁ！？私は元々友達になるつもりなんかなかったわよ！そうだ！マモリちゃんもタラミチュアで操ってあげる。私の着せ替え人形にしてあげるわ。」

そう言ってラミアは自慢のタラミチュアを取り出した。

ボゥッ

ラミアの手にあったタラミチュアは一瞬燃え上がり、チリになった。

「え？…キャーー！」

次はラミアの体が燃えていた。

いや、燃えているのはラミアのワンピースだ。

イーフリートの炎は燃やしたい物を選べる。

「その蜘蛛は絶対に許せない！ポケットにまだたくさん入ってるんだろう？」
マモリの考えは当たっていた。
数多のタラミチュアがワンピースと一緒にチリになっていく。
ラミアは素っ裸になり、その場にへたり込んだ。
「…この変態！変態女装男！…許さない！…何してるの！早く2人ともやっちゃいなさい！」
ラミアの表情からさっきまでの無邪気な笑みが消え、眉間にしわを寄せて怪物ブライに怒鳴った。

怪物ブライがジャンを突き飛ばす。
「ぐ…おぉぉぉぉぉ！」
怪物ブライの4本の腕が丸太のように太くなった。いや、さっきまでも充分太かったのだが。
どうやら先程のラミアの怒声は、ブライの細胞を更に弄ったみたいだ。

怪物ブライは4本の腕を同時に振り上げ…

自分の胸に突き刺した。

ブライの心

ジャンは思っていた。
これでこいつに殺されるならそれも仕方ないと。
闘いぬいたライバル。理性はなくても相手が自分の認めている男なら。
ただこのままこいつを放っておくのだけはなんとかできないかと。
だから怪物ブライの行動が信じられなかった。

「何やってんだ…！？」
巨体からあふれ出る血を見てジャンは言う。
怪物ブライの胸には４本の丸太のような腕が刺さっている。いや、この場合は杭のようなと言った方がいいだろう。
とにかくそんなわけで、ブライの胸からは致命傷と言えるだけの血で真っ赤になった。
人間の赤い血だった。

離れていたマモリも驚いていたが、準決勝でフレイと闘ったマモリにはそれがどういう意味なのかすぐにわかった。
ただこういう結果は求めてはいなかった。

「な…何やってるのよ！そんなのこと命令してないわよ！」
ラミアが焦るのも当然。ブライは完全にラミアの支配下のはずだ。
「…また…失敗ってこと…？」
悔しさが顔に現れる。
「きっと覚えてたんだよ…脳みそぐっちゃぐちゃにされても…ジャンのこと…」

「そんなはずっ…！！」

「ぐ…おぉぉ…」
姿は変わっていても、顔は変わっていなかった。
ブライは苦しそうにジャンを見つめる。
「ブライ…」
ブライは笑った。口からも血を流しながら。
お前との闘いが楽しかったと言いたげに。

そして怪物ブライはそのまま倒れた。

ジャンはただ、倒れたブライと自分の拳を合わせた。

「そんな…」
「ここまでみたいね。…あなたのしたことはとても許されることじゃないわよ！」
「ラミア…」
素っ裸でへたり込んでいるラミアをマモリは見続ける。
マモリも一応男の子なのだから、興奮するべきところなのだろうけど、とてもそんな風には見れなかった。たった今、知り合いの友達が死んだのだから。
いや、もう友達の友達と言ってもいいくらいの関係だ。
そんな人を玩具にして死にいたらしめるような相手だ。普通に接することなんてできない。

その時ラミアとマモリの間に影のようなものが竜巻のように現れた。
その影の竜巻から一人の老人が現れる。
あの時の老人だった。

「あ！おまえ！！」
「ふむ、フルアーマーの少年よ。元気そうで何よりじゃ。また一層可愛くなったの。」
老人は薄気味悪い笑い顔をする。
「うるさい！そんなことより呪いを解け！！じいさんじゃないと解けないんだろう！？」
「…確かに、それはわしの呪いの中でも強力な部類じゃ。わしにしか解けん。じゃが解くわけなかろう…？ちゃんと意図があってそうしたのじゃから…」
「うっ…じゃあその意図ってなんだよ！？」
「それは言えんのう」
「マモリちゃん落ち着いて」
ガメイラが割って入った。
「ほぉ…人格魔導具か。おもしろい物を持っておるのぅ」
「茶化さないでいいわ。あなたの…いえ、あなたたちの目的は何なのかしら？ただマモリちゃんに女装させたいわけじゃないんでしょう？」
それだけだったらえらい変態的な目的になってしまう。
「マモリちゃんの中に…英雄ゼウの装備の中にマモリちゃんに使われたら困るものがあるんでしょう？」
「…さっしがいいのぅ。えらく頭の切れる人格のようじゃ。じゃが教えられん。」
「そんな！ふざけるな！！…もうこんな格好恥ずかしくて嫌なんだから！」
「ふん！全然恥ずかしがってないじゃん！！変態！」
今度はラミアが割って入った。
「……私もマモリちゃんはその一線を越えてると思ってたわ…」
ガメイラがまさかの相手側に賛同した。
「…確かに慣れてきちゃってるのかも…でも、だったらなおさら早く戻りたいよ！女の子の格好なんて！…ていうか変態はやめろ！！」

マモリはこの時、かなり女の子の格好で人前に出ることに慣れてしまっていたことに気がついた。
実際何百人と観客がいるところにチャイナドレスで登場し、過激な動きで目立ちまくっているのだから。
「まあその話は後日じゃ。わしはラミアを連れて帰らねばならんからのぅ」
そう言ってまた影のようなものが現れ、老人とラミアを包み込む。
「待って！まだ話は…」
「ぐふふふ」
「マモリちゃん…次に会ったらこの借りは返させてもらうわ…！」
借りも何も、ラミアが勝手に仕組んで勝手に失敗しているのだからマモリには関係ないはずなのだが。
そんなことを言いながら、2人は影の中に消えていった。

広い闘技場に残ったのはマモリとジャン、それから倒れたブライだけだった。
「マモリ…こいつ、俺と闘えて楽しかったみたいだ…」
「うん…」
「ブライ…死んじまったのかな？」
「…わからない…」
流れている血の量はおびただしいことになっていた。
「生きてるわ！」
ガメイラにはわかるらしい。それも知識なのか、また何かを感知したのかはわからないが。
「今どういう状態なのかわからないけど、体に穴があいたぐらいじゃ死なないように改造されてるみたい」
「よかった、助かるかもしれないよ？あ、回復魔法が使える人がいたら…元の体に戻れるかも…」
「そうか。でも、この町に回復魔法が使えるやつなんていないんだ」

「そうなんだ…」
「あれは継承魔法だからね。なかなか使える人なんていないのよ…」
「でもお医者さんじゃ怪我は治せても体を元に戻すことはできないだろう？」
「ああ。それにもちこいつの怪我が治ったとして、また暴れたらその医者が殺されちまう…」
3人（？）は行き詰ってきていた。
「そうね…とりあえず彼を町の外に運んで、封印しておきましょう？」
「でも封印なんてできないだろう？」
「この町の近くにたしか封印機のある祠があったはずよ？そこに行けばなんとかなるかもしれない。」
さすがはガメイラの知識。それはもうタウンページと同じくらい便利である。
「封印機って何？」
「封印機っていうのはね、だれでも簡単に好きな物を封印できる機械のことよ。物質を封印すると、その物質自体の時間が止まるのよ。だいたい祠や教会・神殿にあるんだけど、そこで封印した物はその場所の魔空間に封印されるわ。封印した本人の魔力かその本人が用意した鍵がないと封印を解けないようになっているの。…まあ公共の巨大冷凍庫みたいなものね。」
「そんなのがあるんだな。」
ジャンは感心してガメイラの説明を聞く。半分くらいしか理解できていないようだったが。
「じゃあそこでブライを封印しておいて、回復魔法を使えるやつを探す！ってことだな！？」
「まあ、それが妥当ね。」
「よし！」
そう言ってジャンはブライを持ち上げた。信じられない怪力だった。だがさすがにかなり苦しそうだ。

千年以上生きている大樹を丸ごと運ぶようなものなのだから。
「…は…はやくその祠に案内してくれ！！」
「わ…わかったわ。」
「ジャン大丈夫か？お前だって怪我してるのに…」
「心配してくれるのか？ありがとな！でも大丈夫だ！」

闘技場の外では脱出した観客たちがどうなっているのかとざわめいているだろう。
日も落ちかかっている。
一同はブライ姿を晒すわけにはいかなかったので、下水路を通って町を出ることにした。
ガメイラが言うには下水路が神殿の近くまで繋がっているらしい。

友達だから守る

＜ウォーロッセオ近辺・森の奥の祠＞

祠には割とすんなり来れた。
問題があったとすれば、下水路の入口と出口にブライの巨体が入らなかったことくらいだったが、そこはイーフリートの炎を纏ったマモリの肉体技でなんとかなった。
ブライの体の方は血が止まっているが意識は戻らない。
もっとも意識が戻ったとしたら今頃はまた壮絶なバトルになっているはずだが。

「ここよ。」
その祠は森の中の川のほとりにあった。狭い目の集会場のような内装で、森の中ということもあり、あまり目立たないような感じだ。
一同は祠の中に入る。

「うわ…綺麗なところだね」
「そりゃあ、神聖な場所だから」
「なあ、ここにブライを寝かせてやったらいいのか？」
祠の中心には巨大な魔法陣が書かれている。その周りには三角コーンにボーリング程の玉がついた柱。
正面には台座が設置されていた。
「ええ、そこでいいわ。マモリちゃんはそこの台座の前に立って」
「わかった」
ジャンはブライを魔法陣の中心に寝かせ、マモリは台座の前に移動する。
「じゃあ…ジャンくんは離れてちょうだい」
「わかった」

ジャンが魔法陣から離れ、マモリの後ろに移動する。
「マモリちゃん。私を台座の上に置いて、台座に魔力を注ぎこんで」
「え…あぁ、うん」
そう言ってマモリはガメイラを台座に置き、台座に手を添えて魔力を込める。
「うん。じゃあ今から封印機を作動させるわ。使い方は私が知っているし、操作するから、マモリちゃんは魔力をそのまま注入して頂戴。」
「…うん…」

ガメイラの宝玉が光り出し、その光が魔法陣に伝わっていく。
初めてガメイラを手にした時の箱に似ているとマモリは考えた。
周りのボーリング大の玉が光り出し、中心のブライの巨体がダランと力なく宙に浮いて行く。
ブライの体は死んだような薄紫色に変化し…うっすらと消えていった。

「…はい。完了！マモリちゃん、ジャンくんもお疲れ様」
「お疲れって…ブライはどうなったんだ！？」
目の前でいきなり友達の姿が消えたのだから、ジャンは戸惑ってしまった。
「だから言ったでしょう？封印するって。物質を封印するとその物質の時間が止まって、魔空間に送られるのよ。この祠の魔空間にね。だから大丈夫！時が止まってるんだから、これ以上体がどうにかなることもないし、目を覚まして暴れることもないわ。」
ジャンはまだよくわからないと言いたげだったが、あまり突っ込んでも自分には理解できそうにないと諦めた。
「…でも…その封印ってやつはまた解けるんだよな！？」
今更だが、ジャンはすっかりガメイラと話すのに慣れてしまっていた。

「ええ。」
「俺の魔力を注いでやったら解けると思うよ。」
「おお、そうか。なら良かった。」

「でもその前に回復魔法を使える人を探さないといけないんだよね？」
「ええ、それもあれだけ弄られた体だから、よっぽど優秀な回復魔法が使える人でないと駄目ね…」
「そんなやつこの近くにいるのか！？」
「う～ん…」
マモリはこの近くの人間ではないのだから、知らなくても当然だった。
「…この近くじゃないけど、あてはあるわよ。」
ガメイラは少し考えたあと、思いついたように提案した。
「この大陸でもかなり大きなお城…ここからそう遠くない場所にはバルキュリア城というところがあるわ。そこの王族はかなりの魔法が使えるらしくって、回復魔法の使い手としても代々有名なの。」
「ほんとっ！？」
「だったらそこに行くしかないな！！」
ジャンの顔もみるみる活気に満ちた表情になってきた。
マモリもそのことに素直に喜びを感じていた。

「…というわけで、これからよろしくな！マモリ」
「うん。って言っても僕的にはあのじいさんを探したいんだけど、ジャンの友達も放っておけないからね…とりあえずあの人が元に戻るまでは協力するよ。」
「ああ！それにブライが元に戻ったら今度は俺がマモリに協力してやる！」
「本当っ！？ジャンみたいに強い人が一緒だったら心強いよ！！」

「任せろ！！」
2人がどんどん意気投合していく中で、ガメイラが真剣な声で入ってくる。
「確かに…今回のことで思ったのだけれど、マモリちゃんに呪いをかけたっていうおじいさん…それにあのラミアって子…とても2人だけで協力してるとは思えないわ。」
「どういうことだ…？」
「確かガメイラ、俺の中の父さんの武器で使われたら困るものがあるみたいなこと言ってたよね？…それってどういうこと…？」
「…私にもはっきりしたことは言えないの…ただ、あの2人がもっと大きな組織で動いていて、マモリちゃんが今使えない武器にも関係してるんじゃないかって思って…」
ガメイラの心配そうな声は、マモリも不安にさせた。
もしそうだったとしたら、呪いを解くというのはマモリが思っているよりずっと難しくなる。
―意図があって―
確かに老人はそう言っていたのを思い出した。
だが考えてもわからない…。
「…つまり、もっと強いやつがいるかもしれないってことだな！」
ジャンは真剣に、そして前向きにそう言った。
「まあ、そういう可能性も含まれるわね…」
「じゃあ俺はそいつらからマモリを守る！マモリは友達だからな！それに強いやつとも闘える！あのラミアっていう女にもブライをこんな目にあわせた礼をしなくちゃならない！！これは一石二鳥、いや三鳥だ！」
「ジャン…」
「心配するなマモリ！俺がお前を守ってやるから！！」
「ありがとう…」
ナイトと姫…そういう構図に見えなくもないが、お互い全くそうは思っていなかった。

「それに、結局決勝戦なくなってマモリとも勝負できなかったしな！」
「あぁ…それはどうでもいいや…」
「あれ！？」
「じゃあ、さっそくそのヴァルキュリア城に行こう！」
こうしてマモリはジャンと一緒に新たな冒険へと向かったのだった。

＜とある場所・暗い部屋＞

「ラミアのやつ、また遊んでいるようだな…」
男はベッドに寝そべって天井を向きながら、女に声をかけた。
「あれは遊びというよりは実験…らしいですわよ？」
女は男が寝ているベッドに腰かけ、化粧をしながら返事をした。
「それに今回の実験は私も興味がありましたから。」
「そうなのか？」
「ええ…。それより一度家に帰りますね？城の方も放っておけませんから。」
「…だがあいつがいるだろう？」
「そうですけど…まあ今は戻った方がいいんです。」
「予言か…」
「ふふふ。では戻りますね。私の…ヴァルキュリア城に…」
そう言って女は部屋を出て行った。

バルキュリア城

＞i３５５９５―４３２０＜

＜道中＞

ウォーロッセオを出たマモリとジャンは、ガメイラの道案内に従い、暗い森の中を歩いていた。

「まだ着かないの～？」
「もうちょっとよ！マモリちゃんしっかり！」
「はぁ…喋るだけの魔導具は楽でいいよなぁ。」
「そういうこと言わないの！」
マモリたちがウォーロッセオを出発してすでに５日が過ぎていた。５日間歩きっぱなしで、慣れない野宿。さすがに疲れが溜まっていた。

「なんならおぶってやろうか、マモリ？」
「いいよ。」
ウォーロッセオを一緒に出発したジャンは、すっかりマモリに懐いてしまったようだ。
ことあるごとにマモリに構おうとするので、マモリも困ってた。

「…で、そのバルキュリアってどんな国なの？」
「国じゃないわよ。」
「え、でも城があって王族がいるんでしょ？」
「まあそうなんだけどね…。バルキュリアは１００年前に滅んでい

るのよ。」
「そうなの！？」
「バルキュリアは魔法国家としてとても強い力を持っていたんだけど、その力故に自滅したって感じかしら。１００年前の国王が新しい魔法の開発に失敗してね。城と当時の王女様だけを残して消滅してしまったの。」
「なるほど…。」
ジャンはわかったようなわからないような顔をして相槌を打った。

「じゃあなんで城と王族は残ってるの？」
「その時の王女様、デュナミス王女だったかしら。その人がすごい魔法使いでね。城を護る結界を張って、新しい魔法を売ったりしてなんとか一族としては生き続けることが出来たのよ。」
「その結界のおかげで誰にもにも侵略されずにいられたと言うことか…。」
「そういうことね。まあ私も十年近く眠っていたから今はどうなっているか分からないけどね。…さあ、もうすぐ着くわよ。」

暗い森に太陽の光がさす。
森の中、大きな木々が並ぶその場所に、さらに大きな古城が建っていた。

＜バルキュリア城＞

「へえ、ここがバルキュリア城かぁ。」
「なるほど、森の中の古城といった感じか。」

人の気配など全く感じさせないその城のさびれ具合とは対照的に、数組の男女が入城していく。

「でもそのわりには人の出入り多いね。」

「あぁ、普通に城に入って行ってるな。」

「…おかしいわね。本来こんな人が来るような場所じゃないんけど。」

「じゃあ何かあるのかな。…あ、あの入口の人に聞いてみよう。」

城の入口では黒いスーツに身を包んだ長身黒髪、眼鏡をかけた男が礼儀正しく来客を迎え入れている。

「あの、今日ってここで何かあるの？」

「おや、可愛らしい方ですね。本日バルキュリア城では舞踏会が開かれます。」

男は礼儀正しく答えた。

マモリから見てもかなりのイケメンだった。

「舞踏会！？」

「我がバルキュリア城では週に一度、男女の愛を確かめ合うための舞踏会を開いております。」

「はぁ…。」

「城主のパプリカ様は大変慈愛に満ちた方でして、舞踏会にいらっしゃった男女の中で最も素晴らしいダンスを披露されたお二方に永遠の愛を授けるのです。」

「永遠の愛だと？」

「はい、パプリカ様は先代にも劣らぬ魔力を持った方でして…愛の魔法とでも言いましょうか、男女の愛を不滅のものに出来るのです。毎週その力を求めてたくさんの男女が来場されるのですよ。」

どうやらここの城主はパプリカ様というらしい。その人が回復魔法を使えるのだろうか。

とにかくマモリたちの目的はそのパプリカ様ということになる。
「…えと…俺たち舞踏会の参加希望じゃないんだけど、そのパプリカ様って人に会いたいんだ。会わせてもらえないかな？」
「佐用でございますか。しかしながらバルキュリア城に入れるのは舞踏会に来られた男女のみとなっております。また、パプリカ様に直接お会いできるのはその中から最も素晴らしいダンスを披露された男女です。申し訳ありませんが、それ以外のお客様はお引き取り下さい。」
「そこをなんとか…。」
「私は一介の執事ですので。もしどうしてもというであれば、相応しい正装をされた上で舞踏会にご参加くださいませ。」
その後しばらく交渉してみたが、執事の男が首を縦にふることはなかった。

仕方なく2人は城から少し離れた。
「あれは入れてくれそうにないな。強行突破するか？」
「そんなことして、そのパプリカ様がへそ曲げたらどうするんだよ？…どこか他の入口探す？」
「駄目だと思うわ。決して浸入や侵略を許さない場所だから。正面以外は結界が張ってあるしね。というかむしろこれはラッキーだわ。城に入れてもらう方法が一番の問題だったんだから…。」
「…そうだな、俺とマモリが舞踏会に出ると言って入ればいい。」
「いやいや、2人とも何言ってるのさ！？無理だよ舞踏会なんて！ていうかジャンとカップルの振りするって事でしょ？嫌だよ！！」
「正装って言ってたな。そんなの用意してないぞ。」
「マモリちゃんがお父さんのタキシードを持ってるんじゃないかしら。それを使いましょう。」
「ちょっと！勝手に話進めないでよ！」

「マモリちゃんはドレスだからね。」
「断る！」
「なぜだ…！」
「…マモリちゃん、これしかないと思うわよ？」
「嫌だ！ドレスなんて着ない！」
「今更…」
「俺はマモリと踊りたいぞ！」
「ちょ、何言ってんだ！他の方法考えようよ！」
「ここで時間かけてたらマモリちゃんの呪い解くのも遅くなるわよ！？」
「…！」
「俺はマモリのドレス姿が見たい！」
「うるさい！！」
「マモリちゃん！ドレスなんて正直イージスやイーフリートの格好の方が露出度高いわよ？それに比べれば…」
「う！！……わかったよ…。」
「うん！さすがマモリちゃん、男らしいわ！」
「男の中の男だな、マモリ！」
「……（よく言うよ…）」
「言葉遣いにも気を付けてね。あなたは永遠の愛を求める淑女！って設定だから。」
「勝手に設定を加えるな！」
「じゃあ俺は姫と結ばれたいがそれぞれの立場が邪魔して結ばれない悲劇のナイトって設定で。」
「いつからナイトになったんだよ！」
「ほら！言葉！中に入れてもらってもダンスで気に入られないと王女様には会えないのよ？」
「言葉関係ないじゃん！！」
「気品ある振る舞いが大事なのよ。」
「…わかった。…わかりましたわ！」

マモリは真っ赤になりながら慣れない女言葉に切り替えた。

淑女マモリ

＜バルキュリア城・城内＞

マモリたちが外で浸入だの正装だのと話している頃、キャロット・バルキュリアは毎週のように行われる舞踏会に参加する男女を見てイライラしていた。

「はぁあ！！また舞踏会か。お姉ちゃんの博愛主義もわかるけど、なんでわざわざ他人の恋路の手伝いなんか！それも会ったこともないような他人の…」

キャロット・バルキュリア。
城主パプリカ・バルキュリアの妹であり、現在彼氏募集中。
波打つようなオレンジがかったブロンドヘアーとそれが一層綺麗に見れるボディライン、割と大きな胸、そして芸能人のような綺麗な顔立ちをしているにも関わらず相手がいないのは、恐らく外出をしないこととその性格に難アリだからだろう。

「他人がラブラブしてるところなんて見ても意味無いっての！！」

キャロットはぶつくさ言いながら、いい加減見飽きた舞踏会のホールとそこにいる男女たちを上の部屋から眺めていた。と、そこに１組の男女がホールに入ってくる。

「あら…あの人…！」

「無事に城内に入れたわね。」
日が暮れる直前、マモリとジャンは舞踏会への参加が認められ無事に城に入ることができた。
「執事さんの微笑ましいあの表情が気になるけどね…」
「まあいいじゃないか！俺たちの関係を祝福してくれてるんだろう。」
「キモイ！」
「マモリちゃん！」
「…気持ち悪いですわ！」
「2回も言われた！！」

マモリは仕方無く、スタートロイでもらった舞踏会用のドレスに着替えていた。
ピンクの髪はアップになり、首回りが大きく開いたキラキラと輝く紺色のドレスだ。
スカートは膝下まであり、腰のくびれを強調するシックで大人っぽい作りだった。
ヒラヒラしたスカートの裾からは花柄のセクシーなストッキングを覗かせており、マモリを一層大人っぽく見せている。
おまけにハイヒール。慣れないせいで、マモリの歩き方はフラフラと内股で頼りないものになっていた。
そしてガメイラは花の形のブローチとしてマモリの胸の上で輝いていた。

外観とは違い、古びた様子もなく掃除が隅々までいきわたっている城内。
とてもキラキラしている。
広い廊下。高い天井。特に舞踏会の会場となるホールはとても広く、いくつものシャンデリアで真昼のように明るかった。

ホールではすでに何十組もの男女が愛を語り合っていた。

「なんか…全体からピンク色のオーラを感じ…ますわね。」

「ん？俺は何も感じないが。」

「そう。…それよりジャン。あなたはダンスなんてできるんですか？」

「ダンスか…そういえば初めてだな！」

「やっぱり…」

よく見れば男女たちは４人組や６人組で話こんでいるところもある。それぞれの愛の大きさを競い合っていた。

「あら、可愛いお嬢さんですわね。」

１組の男女がマモリ達のところにやってきた。

「あなたたちも永遠の愛を求めているのかしら？」

「ああ、その通りだ！」

ジャンは、どうだ！俺の嫁は可愛いだろう！と言ってマモリを前に突き出す。

「あっ！ちょっと！」

「へぇ、こんな小さいお嬢さんがこんなところまで来るなんて、よっぽどこいつのことが好きなんだな。」

「（ガーン！）」

マモリがジャンにベタ惚れ…そんな風に見られたらしい。

相手の男の方がマモリとジャンの顔を交互に見比べ、笑いながら言った。

ジャンはなぜかその言葉に満足しているが、マモリにはショックだっただろう。

「ふふふ。私たちは結婚を決めているのですけれど、その後もずっと幸せでいられるようにと思って祝福を受けに来ましたの。だから

負けませんわよ。…でもあなたたちも頑張ってね。」
「え…は、はい。ありがとう…ございます…。頑張りますわ…」
女性の方はとても穏やかな顔でマモリに会釈し、男の方の腕を組んでその場を離れて行った。
とても感じの良い女性だ。
マモリは内心、この2人が永遠の愛とやらを受け取ればいいと思ったが、自分たちの目的を思い出し、できるだけ考えないようにした。
「素敵な人たちね…」
「うん…」
「俺たちもああならないとな！」
「…それ…この舞踏会に限っての話だ…ですわよね！？」
「ん？もちろんだ！！」
ジャンは何が嬉しいのか、マモリを見て機嫌よさそうに笑った。

「あ、あの人…カッコイィィィ！！！！」
キャロットは相変わらず上の部屋からホールを眺め、ジャンの姿を見つけて飛び上がった。
「でも何っ！？あのピンクのちんちくりんは！！」
彼氏募集中のキャロットとしては、たとえ舞踏会に来る男がもれなく彼女がいるとわかっていても、チェックせずにはいられないのだ。
「あぁ…あの人も自分たちの愛を見せつけに来たっていうの！？…まあここに来るっていうことはそういうことだもんね…。」
「あ～ダメ！認められない！この舞踏会始まって以来のイケメンだもの！相手があんな…胸もない色気もないような豆女だなんて！！」
当然キャロット基準でのイケメン評価なのだが。
「仕方ないわ…ここからあの2人が破局するように念じてみよっと。あああ、そういう魔法覚えとけばよかった…」

当然そんな魔法はないし、あってもキャロットは覚えてないのでただの気休めでしかないわけである。

ホールでは豪華な夕食が出され、立食パーティーのようになっていた。
「もぐもぐ…マモリ…ちゃんと食べてるか？もぐぐ…こんなに食い物がでるなってな！ももも…これだけでも来たかいがあったな…！」
「…マモリちゃん、せめて今はあんな食べ方はしないでね。」
「……わかってますわ。」
そう言ってマモリは自分の知りうる中で一番上品な方法で食事をとった。
もっともその方法も、けして上流階級で通用するものではなかったが。
「というかジャン、ちゃんと目的はわかってますわよね？」
「もぐぐ…わ、わかってるさ！ブライのためだばばな！」
「……」
さすがのマモリも別の場所に移動し、自分のペースで食事を始めた。

立食パーティーも良い頃合いになってきたところで、城門にいた執事がホールの正面に現れる。

「皆様、お食事の方は楽しんでいらっしゃいますでしょうか。皆様方におかれましては、我がバルキュリア城の舞踏会にご足労頂きありがとうございます。」
ジャンも食事を中断し、執事の方に顔を向けた。
「私、執事のレオナードと申します。今宵は皆様がより深い愛情を育み、素敵な夜になりますようお手伝いさせて頂くしだいでありま

すので、どうぞよろしくお願いします。」
丁寧すぎるような口調で執事は話を続けた。
「なお、すでにご存じの事と思いますが、今夜の舞踏会にて最も素晴らしいダンスを…というより最も愛し合っていると思われるお二方には、城主パプリカ・バルキュリア様からのささやかな祝福をお受け取り頂きます。皆様のお互いを思い合う素敵なダンスを、パプリカ様も楽しみにしていらっしゃいますので、どうかそのようなダンスを。」
ホールのほとんどの人間が息を呑んだ。みな目的は楽しむことではなく、その祝福を受けることなのだ。
「それでは、そろそろ始めましょうか。音楽が流れ出しましたらご自由にお楽しみ下さいませ。」
そう言って執事は奥の部屋に向かった。

「ジャン、いよいよ始まりますわよ！」
「おう！俺たちの愛の力があればきっと一番になれる！」
「…本気で言ってるの？ダンス初めてなんでしょう？」
「大丈夫だ！さっきの人も最も愛し合ってる2人が一番って言ってただろう？」
「（なおさら望み薄いじゃん！）」
「まあダンスの方はマモリちゃんに任せてたら大丈夫だと思うわよ。フルアーマーの魔法で今のマモリちゃんはダンスもとても上手になってるはずだから。ジャンくんはマモリちゃんに体を預けて。」
「マモリに体を預ける…ゴクッ…」
「今！変なこと考えなかったか！？」

そして優雅なクラシックメロディーがホール全体に響き始める…。

舞踏会

流れる音楽に合わせ、ホールいる男女たちが踊り始める。
永遠の愛のために練習を重ねてきたのか、どの組も遜色ない美しいダンスを披露していた。
ホール全体は一見楽しく優雅に見えるが、他の組みを意識し合っているのがはっきりわかる空気だ。

一方マモリは、ジャンの滅茶苦茶な踊りをフォローしながらぎこちないダンスを続けている。
手を引き、足を運ばせ、なんとかダンスの形を保っていた。
マモリ自身も魔力によって体が自然に動く。または次にどう動くべきかがわかるようだ。ダンスとなると、慣れないはずのハイヒールで華麗なステップを踏んでいる。
しかし、ダンス自体に慣れているわけではないので戸惑っているのが表情に出ていた。
その様子は残念な意味で目立っていた。

「ジャン！もう少し上手く動けないのですか？」
「おおぅ、悪いマモリ…」
「ジャンくん、そこで右足を前に。はい、ワン・ツー、ワン・ツー。」
なんだかダンス講習のようになっていた。

「（あの2人なんなのかしら…）」
「（まるでなっていないな。）」
「（あの子たちには買ってるわね。）」
「（クスッ…子どもが背伸びしちゃって。可愛い。でもあれじゃ駄目ね。）」

周りの男女はマモリたちのダンスを見て、余裕の笑みを浮かべたり、優越感に浸ったりしていた。

「――なんなのあの子！私の王子様に恥かかせてるんじゃないわよ！」

上の部屋ではキャロットが2人のダンスがあまりにもふがいないために、そのイライラをさらに増していた。

実際ジャンがマモリの足を引っ張っているのだが…恋は盲目というやつである。

「…でも、これであの2人がお姉ちゃんに選ばれることはないわね。舞踏会が終わったら下に行ってあの人に声かけてみよう。」

――コンコン

「ん？誰？」

「私よ、キャロット。」

「ああ、お姉ちゃん。入っていいわよ。」

入ってきたのはシルバーの美しい髪、絶世の美貌とも言えるような20代後半くらいの綺麗な女性だった。

まさしく、キャロットの姉、パプリカ・バルキュリアである。

「どうしたの、お姉ちゃん。」

「たまにはあなたと舞踏会を鑑賞するのもいいかと思って。…今夜はどう？素敵な恋人たちはいるかしら？」

「知らないわよそんなの…。お姉ちゃん他人がいちゃいちゃしてるの見て何が楽しいの…？」

「あら、素敵じゃない。今この城の中にたくさんの愛が溢れてるのよ？これってとても幸せなことじゃない？」

「何それ全然わからない！だってあたしには一緒に踊ってくれる人なんていないんだもん…。」
「だったらキャロットも良い人を見つけて恋をすればいいのよ。私は早くこのホールであたなが素敵な男性と踊るところを見てみたいと思っていたのよ。」
「（あたしだってそうしたいっての！…でも今回はそのチャンスだわ。やっとあたしのタイプの人が現れたんだもん！でもこのことお姉ちゃんに言うと怒りそうよね…。アンチ略奪愛って感じだしね。）…お姉ちゃんこそ、遠くで暮らしてるお相手様とはどうなのよ？よく城を留守にするけど、その人に会いに行ってるんでしょう？」
「ふふふ、私たちも愛し合ってるわよ。でもあまり会えないから…この舞踏会の人たちを見てるとその寂しさが薄れるのよ。」
「ふーん、…だったらもっと会いに行けばいいのに。この城にはあたしもいるし、レオナードだっていてくれるんだから。」
「…そうね。」

それからしばらく2人で下のホールの舞踏会を鑑賞していた。

舞踏会も終盤に差し掛かり、ホール全体も盛り上がっていた。
どの組もできる限り美しいダンスを披露することに必死になっている。
マモリたちもそれは同じで、マモリはできるだけジャンをリードできるように…ジャンもできるだけマモリの動きについていけるように踊っていた。
さすがにジャンも慣れてきたようで、動きもだいぶ見られるようになってきたが、練習を積んでいる他の男女とは比べ物にならない。
「わ！」

マモリがジャンの足つまずき、よろめく。
「あ、マモリ！」
ジャンは握っていたマモリの手を引き、膝をついてマモリを抱きかかえた。
その体勢のまま音楽は鳴り止み、図らずしも2人はフィニッシュを決めてしまった。

マモリたちがちょうどフィニッシュを決めたところでホールは暗くなり、どこからともなく先ほどの執事レオナードが現れる。
レオナードのいる場所にスポットライトが当たり、司会者としての立場が際立っていた。
「皆様、今宵はお楽しみいただけたでしょうか。」
相変わらず丁寧な口調で喋りだす。
「残念ながら本日の舞踏会も終わりの時間が迫って参りました。」
数人の男女がパチパチと手を鳴らす。
「今回の舞踏会はまた一団と素晴らしいもので、私も皆様のダンスと愛情に関心いたしました。皆様もお相手の方との愛情が一層育まれたのではないかと思います。」
ホールのパチパチという音が次第に大きくなっていく。
「皆様にはまた、ぜひともこの舞踏会に参加していただきたく思っております。城主パプリカ様も、皆様のダンスにとても満足しておられる様子でした。本当にありがとうございます。…それでは最後になりますが、本日のダンスで城主パプリカ様のお気に召されましたお二方を発表いたします。」
どの組みもこの時を待っていましたという具合にうずうずし始めた。
「（…王族の人に会うにはここで気に入ってもらうのが一番早いんだけど…無理だろうなぁ。…今のうちに他の方法考えといたほうがいいかな。）」
マモリは実際もう駄目だと諦め半分だった。自分たちのダンスが明

らかに他に劣っていたことはわかっていたからだ。

上の部屋にいるキャロットは、どうでもよさそうにホールを見ていた。

「…今日も退屈なパーティーだったわ。見てるだけなんだから当たり前だけど。でも素敵な人を見つけたし、…みんなが帰りだしたら声かけにいっちゃおう！」

さっきまでいたパプリカは、永遠の愛の祝福の準備と言って少し前に部屋を出ていたので、今はまたキャロット一人になっていた。

「そう言えばお姉ちゃん、毎回自分が気に入ったカップルを選んで会ってるのよね。永遠の愛の祝福とか言って…。どんなことしてるんだろう？」

そんなことを考えていたキャロットに、ある作戦が閃いた。

「……あっ！もしその祝福を私があの人と受けとることができたら簡単にラブブになれるんじゃないかしら！！お姉ちゃんの魔法ならそれくらい簡単なはず！…ちょっとお姉ちゃんのところ言って来なきゃ！」

キャロットは半暴走気味に部屋を飛び出した。

ホールでは暗い部屋にスポットライトがぐるぐる回っている。

どの男女も自分達が照らされることを祈っているようだ。

マモリは半分あきらめていたが、どういうわけかジャンは自信に溢れている様子だ。マモリにはそれが意味わからないようだった。

「では、発表いたします。」

執事のレオナードは、一息置いて、続けた。

「このお二方です。」

マモリとジャンにスポットライトが当てられた。

「えぇ！！？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1219y/

フルアーマー ・クロスドレス

2011年11月24日15時49分発行